

544

544  
96

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50<sup>6m</sup> 1 2 3 4 5

始





29. 9. 30



~~391-162~~  
444-96



仲よし  
に贈る





貝殼追放

水上瀧太郎著

中よしの韻





は

し

が

き



古代希臘アゼンスに於ては、人民の快しとせざるものある時  
 其の罪の有無を審判することなく公衆の投票によりて、五年間  
 若くは十年間國外に追放したりといふ。牡蠣殻に文字を記して  
 投票したる習慣より貝殻追放の名は生れしとか。

今日人は此の單純野蠻なる審判を、吾等には無關係なる遠き  
 世のをかきき物語として無關心に語り傳ふれども、熟々惟みる  
 に現在吾々の營める社會に於ても、一切の事總て貝殻の投票に  
 よりて決せらるゝにはあらざるか。厚顔無恥なる彌次馬がその



數を頼みて貝殻をなけうつは、敢てアゼンスの昔に限らず、到る  
 處に行はると雖も、殊に今日の日本に於てその甚しきを思はざ  
 るを得ず。その横暴に苦しみつゝ、手を束ねて追放を待つは、潔  
 きには似たれどもわが生身の堪ふるところにあらず、果して多  
 數者と意向を同じくするや否やはしらずと雖も、然かず進んで  
 吾も亦わが一票を投ぜんには。

大正六年冬

貝殻追放目次

はしがき……………(一)

○新聞記者を憎むの記……………(一)

○「八千代集」を読む……………(三九)

愚者の鼻息……………(七一)

「その春の頃」の序……………(101)

購書美談……………(111)

向不見の強味……………(114)

先生の忠告……………(117)

「未枯」の作者……………(121)



△兵隊ごっこ……………(二四七)

○女人崇拜……………(二七二)

永井荷風先生の印象……………(三〇一)

「文明一周年の辭」を讀みて……………(三〇五)

「幻の繪馬」の作者……………(三二一)

泉鏡花先生と里見弴さん……………(三二七)

初夢……………(三四五)

此頃の事……………(三七七)

妻の子……………(三九一)

貝殼追放目次終



新聞記者を憎むの記



大正五年秋十月

八月の中旬に英京倫敦を出た吾々の船は、南亞弗利加の喜望峯を廻り、印度洋を越えて二ヶ月の愉快な航海の終りに、日本晴といふ言葉が最も適確にその色彩と心持とを云ひ現す眞青な空を仰いで、静な海を船そのものも嬉しさうに進んで行く。左舷には近々と故郷の山々が懷を開いて迎へてゐる。自分は曉から甲板に出て、生れた國の日光を浴びながら、足掛け五年の間海外留學の爲に遠ざかつた父母の家を明瞭に想ひ浮べて欣喜した。

勿論自分は後にして來た亞米利加、英吉利、佛蘭西に楽しく過した春秋を回顧して、恐らくは二度とは行かれないそれらの國に、強い悔恨と執着を残したこと



は事實であつた。けれども、過ぎ去つた日よりも来るべき日は、より強く自分の心を探へてゐた。常に晴れわたる五月の青空の心を持ち、唇を噛む事を知らずに、温い人の情愛に取圍まれて暮す世界を描いてゐた。而してその光明と希望に満ちた世界を、形に現したのが目前の朝日の中に聳ゆる故國の山河であると思つた。船は神戸に近く、陸上の人家も人も近々と目に迫つて來た。昨夜受取つた無線電信によると九州から遙々姉が迎へに來てくれる筈である。東京では父も母も弟も妹も、九十に近い祖母も待暮してゐるに違ひない。その人々にも今夜夜行に乗れば明日の朝は逢へるのである。日本人には珍しい、狡猾卑劣な表情を持つてゐない公明正大な父の顔、憎惡輕侮の表情を知らない温情の象徴のやうな母の顔が、瞭然と目の前に並んで浮んだ。常に何等か自分の心を打込む對象が無くしては生きてゐる甲斐が無いと思ふ自分にとつて、自分程立派な兩親を持つ者

は世界に無いと思ふ信念に心のときめく時程純良な歡喜は無い。その父母の家に明日から安らかに眠る事が出来るのだ。幾度もく甲板を往來して足も心も踊るやうに思はれた。

午前九時、船は遂に神戸港内に最後の碇を下した。船の廻りに集つて來る小蒸汽船の上に姉と姉の夫と、吾々の家の知己某氏夫妻が乗つてゐて、遠くから半巾を振りながらやつて來た。約三年間音信不通になつてゐた梶原可吉氏も來てくれた。久々ぶりの挨拶を済ましてから、此の二月の間、寒い夜、暑い夜を過して來た狭い船室にみんなを導いて、心置き無い話をし始めた。

其處へ給仕が二枚の名刺を持つて面會人のある事を告げに來た。大阪朝日新聞と大阪毎日新聞の記者である。勿論自分は面會を斷るつもりだつた。折角親しい人々と積る話をしてゐるところへ、見も知らぬ他人の、殊に新聞記者が割込んで、



材料取りの目的で、歐洲の近狀如何などといふ取とめも無い大きな質問をされては堪らないと思つた。然し自分が給仕に斷るやうに頼まうと思つた時は、既に二人の新聞記者が船室の戸口から無遠慮に室内を覗き込んでゐた。二人とも膝の抜けた紺の背廣を着て、一言一行極端に粗野な紳士であつた。勿論吾々の樂しき談笑は此の二人の侵入者の爲に中斷されてしまつた。彼等は是非話を承り度いと、殆んど乞食の如く自分の前後に立ちふさがる。

兼て神戸横濱の埠頭には此種の人々がゐて、所謂新歸朝者を惱ますとは聞いてゐたが、それは知名の人に限られた迷惑で、自分の如きは大丈夫そんなわづらひはないと思つてゐたので、同船の客の中に南洋視察に行つた官立の大學の教授のゐる事を告げて逃げようとした。けれども彼等は承知しない。五分でも十分でもいゝから自分の話を聞き度いと言ひ張る。話は無い、話し度い事なんか何にも無い

と云ふと、そんなら寫真丈撮させてくれと云ひ出した。

これは一層自分には意外な請求だつた。誰人も名さへ知らない一書生の寫真を新聞に掲げて如何するのだらう。冗談では無いと思つて斷つた。すると傍の姉夫婦が口を出して、寫真を撮して貰ふかはりに談話の方は許して頂いては如何だと口を入れた。自分も之に同意した。談話より時間の短い丈でも寫真の方が樂だし、且は此の粗野なる二紳士を一刻も早く退散させ度いと願つたからである。其處で自分は甲板に出た。梶原氏が付添になつて来てくれた。

ちやんと用意して待つてゐた各新聞社の寫真係りが、藤椅子を据ゑ、いかにも美術的の趣向だといふやうに浮袋を側に立てかけて、扱て自分を腰かけさせた。馬鹿々々しい事だと思つた時は、もう寫真は撮つてゐた。それでおしまひだと思つて立上らうとすると、新聞記者は最初の約束を無視して、是非とも話をしてく



れ、追つて来た。約束が違ふではないかと詰つても、平気で、値うちの無いお低頭を安賣りするばかりである。しまひには一分でも二分でもいゝと、縁日商人のやうな事を云ひ出した。それでは五分丈約束するから、その五分間に質問してくれと云つて、自分はかくしから時計を出して掌に置いた。

二人の中のどつちが朝日の記者で、どつちが毎日の記者だつたか忘れてしまつた。後日の爲に名刺丈は取つて置いたから机の抽出しても探せば姓名は判明するが、それは他日に譲らう。兎に角此の二人は、他人の一身上に重大な關係を惹き起すやうな記事を捏造する憎むべき新聞記者であつた。

五分は瞬間に過ぎた。時計の針が五分廻る間に自分が質問された質問と、答へた返答は左の如きものであつた。

第一の問。貴下は外國では何を勉強して來ました。經濟ですか。

第一の答。私は雜學問をして來たので、何といふ一科の専門はありません。但し學校では經濟科の講義を聴講しました。

第二の問。文學の方はやりませんでしたか。

第二の答。私は學問として文學を修めた事は日本にゐた時も外國にゐた時も全くありません。

第三の問。今後職業を擇ぶに就いては保險事業をお擇びですか、又は慶應義塾の文科で教鞭をおとりになりますか。

第三の答。私の父は保險會社に勤めてゐますが、それも家業といふのではなく株式會社の事ですから息子も必ずその爲事をするといふ事はありません。慶應義塾になんか行つたつて教へる學問がありません。

第四の問。貴下の就職問題に就いての御尊父の御意見は。



第四の答。父は私の撰擇に任せるでせう。

第五の問。外國の文藝上新運動に就いて何か話して下さい。

第五の答。別に新運動なんしものは無いでせう。日本の方がその點では新しいでせう。

恰も五分たつたので自分は最後の一句を冗談にして立上らうとした。するとたつたもう一つ質問し度いと云つて引止められた。

第六の問。今後創作を發表しますか。

第六の答。氣が向けばするでせうが、兎に角自分なんか駄目です。以前書いたものなんか考へても冷汗です。

傍から梶原氏が、あれは既に作者自身が葬つたものであると、自分の小説集『心づくし』の序文を引いて説明してくれた。

右の如く簡単な質問に對する簡単な返答で苦痛の五分が過ぎた時、自分は後には何も氣がかりな事の残つてゐない爽快な心持で姉や知人の群に歸つた。梶原氏は自分の新聞記者に對する應對が意外に練れてゐると云つて稱讚し、これを海外留學の賜とする口吻をもらした。「君はなかなかうまいなあ。」と云つて彼は自分の肩を叩き、自分も「うまいだらう。」と云つて笑つた。

船の人々に別れを告げ、上陸してからは、先づ湯にでも入つて、ゆつくり食事もしたらよからうといふ人々の意見に任せて、神戸の町の山手の或料理屋に行かされた。姉夫婦は今夜大阪まで、梶原氏は京都まで同行しようとして云つてくれた。

事毎に新鮮な印象を受ける久々の故郷は、自分を若々しくした。姉は自分をくづく見て、何時迄たつても小僧々々してゐると云つて笑つた。



楽しい食事の後で、自分は姉夫婦と話しながら夕方迄その家に寝轉んでゐた。新聞記者の事なんか全然忘れてゐた。

三宮驛から、夕暮汽車に乗る時に、何気なく「阪毎日新聞の夕刊を買つた。その二面に麗々と自分の寫眞が出てゐて、『文學か保険か』と大きな標題の横に、『三田派の青年文士水上瀧太郎氏歸る』と小標題を振つて、十七字詰三十八行の記事が出てゐた。その中に書いてある事は自分が想像もしなかつた意外千萬なもので、殊に自分を驚かしたのは所謂青年文士の談話として、自分が廢嫡されるかどうかといふ問題を自ら論じてゐる事であつた。

今此處にその長々しい出たための新聞記事を掲げて、一々指摘してもいゝけれど、第一の問題たる廢嫡云々が、自分の如き我家の四男に生れたものにとつて、如何して起るかと反問する丈でも十分その記事の根據の無い事を證明する事が出

來ると思ふ。自分には尙二人の兄が現存して居る。その中の一人は既に分家して一家の主人になつてゐるけれど、當然我家を相續すべき長兄を差置いて、どうして自分が廢嫡される資格があらう。自分はこれを廢嫡される權利と云はう。その廢嫡される權利を獲得するには、先づ我家の嫡男なる長兄が廢嫡されてゐなければならぬ。

あまりの事のかしさに自分は抱腹して、その新聞を梶原氏及び姉夫婦に見せた。

何處からどういふ關係で、自分に廢嫡問題なるものを結び付けたかは、その時はあまりの馬鹿々々しさに存外氣にもかけなかつた。自分はたゞその記事の、今朝の甲板上の五分間に取交した問答に比べて、あまり手際のいゝ嘘であるのを憤つた。しかし故意と機嫌よく些末な記事の誤りのみを人々に指摘して笑つた。



第一にをかしかつたのは『氏は黒い頭髪を中央から割然と左右に分け、紺セルの背廣服を着けたり』と書いてゐるが、自分は曾て頭髪を中央から分けた事は一度もない。その日も中央から分けてゐなかつた事は、その記事の前に掲げた寫真でもわかるのであつた。『割然と分け』といふのも事實相違で、自分は人々に自分の頭を指さし示して笑つた。日本風の油でかためて櫛の目を割然と入れた分け方を嫌つて、自分は油無しのばさばさの髪を、故意と女持の大きな櫛で分けてゐる。『紺セルの背廣服を着けたり』とあるが、自分はその日黒羅紗の服を着てゐた。記者は先づ自分と父との間に職業問題に就き「意志の疎隔を生じ居れりとの風説」を糺したと云つてゐるが、彼は自分にむかつて、そんな質問をした事は無い。自分は父の寵兒ではあつても父との間に意志の疎隔などを生じてはゐなかつた。しかし狡猾なる記者は、その失禮な質問に對して、自分が平氣で返答をしてゐる。

やうに捏造した。『併し私の趣味が既に文學にあるとすれば、保險業者として私が父の如く成功するや否やは疑問です』と洒々として新歸朝の青年文士は述べてゐる。

幸か不幸か自分は其の後某保險會社の一使用人として月給生活をする事になつた。自分と雖も會社に於て、出世をするのはしないよりも結構である。それが『成功するや否やは疑問です』などとふてくされた事を云つてゐると思はれるのは、第一出世の妨げであり、同僚諸氏に對して甚だ心苦しい次第である。

次に上述の廢嫡問題が出て、その廢嫡を事實にしようとする運動してゐるのは『三田文學』の連中で、青年文士はその運動者に對して『私はその好意を感謝するものです』と云つてゐるのである。

想ふに此の記事の筆者は極めて想像の豊富な人であらうと思ふ。第一文章がう



まい上に、知らない人が讀むと如何にも眞實らしく思はれる程無理が無く運んでゐて、此種の記事にはつきものの誇張を避けたところなどは、嘘詐の記事では黒人に違ひない。

殊に最後へ持つて来て「父の業を繼いで保険業者になるか、友人の盡力によつて文學者になるか、それは歸京の上でなければ分らず、未だ未だ若い身空ですからね、一向決心がつきません。ハハハハと語り終つて微笑せり」といふ一文で結んだところは、全然自分の會話の調子とは別であるが、知らない人には面目躍如たりだらうと思はれる。若しこれが他人の身の上に起つた事だつたら、自己此の記事を信じたに違ひない。自分は斯の如き達者な記者を有する大阪毎日新聞の商賣繁昌を疑はない。

自分はいかにもをかした話だといふやうにわざと平氣な顔をして人々にその記

事を見せたが、梶原氏も姉夫婦もひどく眞面目な顔をして自分を見つめてゐるのであつた。

汽車が大阪に着くと姉夫婦は其處で下りて、自分は梶原氏と二人で残つた。さうして京都迄の小一時間に所謂水上瀧太郎廢嫡問題なるもの由來を同氏によつて傳へられた。

此の無責任極まる記事は始め東京朝日新聞に出たのださうだ。憎む可き朝日新聞記者の一人は我家を訪ひ、父に面會を求めてその談話と共に、無理に借りて行つた自分の寫真とを並べ掲げて、世人の好奇心を迎へたのださうだ。

自分はその朝日の記事を知らない。しかし元來自分が廢嫡の權利を持つてゐない限り問題となる可き事柄で無いか、我が父談話といふのも勿論耻を知らぬ記者の捏造しつゝ、いふれども、その記事を讀む人間の數を思ふ時、自



分は平然としてゐられなかつた。

殊 自分を怒らしたのは、その朝日新聞の下等なる記者が、老年病後の父に對して臆面も無く面會を求め、人の親の心を痛める事を構へて、之を問うたといふ一事である。自分の歸朝期日の豫定より早くなつたのも、父の健康が兎角勝れず、近くは他家の祝宴に招かれた席上昏倒したといふ憂ふ可き事の爲であつた。物質的に酬はれる事の極めて薄かつたにも拘らず、日本の實業家には類の無い、責任感の強い父が一生を捧げた事業から退隠した時、最も父を慰めるのは吾々子等の成長であるに違ひない。その子等の一人の、長らく膝下にゐなかつた者が、幾年ぶりで歸つて來るといふ矢先に、不祥なる噂を捏造吹聴され、天下に之を流布すべき新聞紙の記事に迄されたといふ事は、親として心痛き事であると同時に、世の親に對して、如何にも無禮無慮である。彼をおもひ之をおもふ時、自分は心底

から激怒した。

京都で梶原氏に別れると直ぐに手帖を取出して、先づ大阪毎日新聞に宛て、夕刊記載の記事の捏造である事、その記事を取消すべき事、その捏造を敢てしたる記者を罰すべき事を書送るつもりで草案を書き始めた。先づ目に觸れたものから溯つて朝日の記事一讀の後、それにも一文を草して送り誥らうと思つたのである。

自分が久しぶりで歸つた故郷の第一日は、かくて不愉快なものになり終つた。新聞社へ送る難語文を書き終り、手帳をとちて寢臺に入つても、安かに眠る事は出来なかつた。

翌朝、愈々東京へ近づいて行く事を痛切に思はせる舊知の景色が、窓近く日光に輝いてゐるのを見た時、自分は再び爽やかな心地で父母の家にかへりゆく身を限



り無く喜んだ、口漱ぎ、顔を洗ひ、髯を剃つて、一層晴々した心持になつて食堂へ入つて行つた。

何處にも空いた食卓は無く、食卓があれば必ず知らない人がゐた。つかつかと進んだのが立停つて見渡して、駄目だと思つて引返さうとすると、一隅の卓にゐた若い紳士が自分を呼び止めて、その卓に差向ひではどうだと云つてくれた。自分には喜んで會釋して席に着いた。

給仕に食品の注文をして、手持無沙汰であると、既に最後の珈琲迄済んだその紳士はいきなり自分に向つて話しかけた。「貴方は今朝の新聞に出てゐる方ではありませんか」と訊ねるのである。自分は驚いて彼の顔を見た。紳士は、かくしから一葉の新聞を出して自分に見せた。大阪朝日新聞である。

「文壇は日本の方が」といふ變な題が大きな活字で組んであつて、傍に——ズツ

ト新らしい——と註が入つてゐる。此の題を見て自分は肌へに粟を生じた。世の中に洒落の解らない人間程怖ろしいものは無いと云つた人があるが、此の記事の筆者の如き最も洒落の解らぬ人間であらう。自分は記者兩人の愚問を避ける爲に文藝上の新連動如何の間に對して新しいのは日本だと答へたが、その時の自分の語氣から、それが其場限りの冗談に等しいものだつた事は、誰にもわかる筈であつた。馬鹿に會つてはかなはないと思つた。

けれども更に考へてみると、此の記者も亦記事捏造の手腕に於ては、大阪毎日の記者に勝るとも劣らない黒人藝である。或は自分の言葉は勿論まともに取る可きものとは思はなかつたが、一寸標題として人目を引き易い爲、わざとそのまゝ戴せたのかもしれない。怖ろしいのは洒落の分らない奴よりも、責任感の無い奴が一層だと思はざるを得なかつた。



此の記事によると、初めて自分の廢嫡問題なるものを捏造掲載した時の標題は「廢嫡されても文學を」といふのであつた。淺薄な流行唄の文句のやうなこんな標題で、ありもしない悪名を書き立てられたのかと思ふと、自分の心は暗くなつた。

あまりにくだくだしい捏造指摘は自分ながら馬鹿々々しいから止めるが、日本新聞界の兩大關と自稱する毎日朝日の記者が、一人の口から出た事を全然違つて聴取つた事實を、此の二つの記事を對照して見る人はあやしまなければならぬ。等だ。二人とも全然自分勝手な腹案を當初から持つてゐて、記事の大部分は自分に而會する前に原稿として出來上つてゐたのだらうと思ふ。たゞ彼等が一致した事は、自分の黒い衣服を紺背廣だと誤記してゐる一事ばかりであつた。毎日記者は「ハハハハハ」と語り終つて微笑せり」と結んだが、朝日記者は「苦し氣に語つ

て人々と共に上陸した」と記してゐる。人を馬鹿にした話である。二人揃つてやつて來て二人で質問しながらお互によくも平氣で白々しい出たらめを書いてゐられるものである。馬鹿、馬鹿、馬鹿。自分は思はず叫ぼうとして、目の前の紳士の存在を思つて苦笑した。

「どうも新聞記者といふものは謠を書くのが職業ですから困ります」と云ひながら、その新聞を持主に返へした。「それでも貴方のお話を伺つて書いたのでせう」と若い紳士はいかにも好奇心に光る目で自分を見ながら聞き出した。自分は不愉快な氣持で食事も咽喉を通らなくなつたが、簡単に神戸港内の船中で二人の記者に迫られて四五の問答を繰返したのが、こんな長い捏造記事になつたのだと説明した。さうして肉刀をとり、肉叉をとつて話を逃れようとした。すると相手は給仕を呼んで菓物とキュラソを命じ、巻煙草に火をつけて落つて話し出した。



食後のいい話材を得た満足に、紫の煙は鼻の孔からゆるやかに二筋上つた。

自分が如何に説明しても、彼は矢張り新聞の記事を信じるらしく、少くとも廢嫡問題の將來に最も興味を持つ心持をかくし切れないのであつた。「兎に角才能のある方がそれを捨てるといふのは惜しい事ですから」などと一人合點で餘計な事をいふのである。自分は苦笑しながら食事を終つた。

東京に着いて、母や弟妹や親類、友だちに久々で逢ふ時、自分はもう情氣でゐた。誰しも自分を異常なる出来事の主人公、見做してゐるらしく思はれてしかたがなくなつた。あれ程心を躍らして待つた父母との對面にも、自分は合はせる顔が無いやうに思はれた。自分が東京に着く前に既に關西電話が傳へられて、毎日朝日と同じやうな記事が都下の多くの新聞に出てゐた。

その日から我家の電話は新聞社からの電話で忙しく鳴つた。玄關に名刺を出す

ごろつきに等しい新聞記者を一人々々なぐり倒したくいきまく自分と、それらの者の後日の復讐を恐れる家人との心は共に平靜を失つてしまつた。老年の父母が自分が憤りの餘り、更に一層彼等から意地の悪い手段を以て苦しめられる事を氣づかふのを見てゐると、遂々自分の力が弱くなつてしまつた。新聞社へ宛てて書いた難詰文も破いて捨てなければならなかつた。

あまりに多数のごろつきの玄關に来るのを歎く母の乞ひを容れて、中の一新聞を擇んで面談し、事實を語る事を承知して、折込電話で會見を申込んで來たタイムス社の記者と稱する者に丈け逢ふ事に決めた。

二人のタイムス記者と稱する者が大きな風呂敷包を持つてやつて來た。自分は勿論チャパン・タイムスと信じてゐたので、そのつもりで話をしてゐた。彼等は巧妙に調子を合せてゐる。自分は教はりはしなかつたが、慶應義塾の高橋先生は今



でもタイムスに筆を執つて居られるかといふ問にも、然りと返事をしたのである。さうして約三十分は過ぎた。すると二人の中の一人は俄に話をそらして、實は今日は別にお願ひがあると云ひながら、その持参の風呂敷を解いて、『和漢名畫集』といふものを取出し、それを買つてくれと云ひ出した。創立後幾年目とかの紀念出版だといふのである。自分は勿論断つたが、それならお宅へお買上を願ふから取次いでくれといふので、爲方なく奥へ持つて行つた。母は買つてやつて早く歸した方が無事だと云ふのである。馬鹿々々しい、こんな下らない物をとほ思つたが、母の心配してゐる様子を見ると心弱くなつた。とう／＼自分にはなけなしの小遣から『和漢名畫集』上下二冊金四拾圓也を支拂はされた。

ところが後日聞くとところによると、このタイムス社は、ヂャパン・タイムス社ではなく、日比谷邊りに巢をくつてゐる人困らせの代物であつた。自分は自分の

人の好きをつくづくなくなさけなく思ふと同時に、かゝる種類の人間の跋扈する世の中を憎んだ。

新聞雑誌の噂話に廢嫡問題の出る事は尙しきりに續いた。これよりさき大正二年の春にも、憎むべき都新聞は三日にわたつて『父と子』なる題下に、驚くべき捏造記事を掲げた事があつた。その記事の記者は自分が曾て書いた小説を、すべて作者の過去半生に結びつけて、ありもしない戀愛談迄捏造した。厚顔にしてぼんくらなる記者は、その記事の最後に、『彼は今英國のケンブリッジにゐる』と書いて、御叮嚀にも劍橋大學の寫眞を掲げた。當時自分は北米合衆國マサチューセツ州のケムブリッジといふ町にゐたのである。

その都新聞の切抜を友だちの一人が送つてくれた時、自村は随分怒つた。しかし考へてみると、あゝ形も無い戀愛談は、あと形もない廢嫡問題よりは、少くと



も愛嬌がある丈けましであつた。自分は自分が如何に此の下等愚劣なる賤民、即ち新聞記者の爲に、其後も屢々不快な思ひをさせられたかを述べる前に、ついでに出たための愛嬌話を添へて僅かに苦笑しようと思ふ。

大正五年十月二十七日発行の保険銀行時報といふ新聞には、二つの異なる記事として自分の事を材料とした捏造記事が出てゐる。記者はさる消息通らしい筆つきで書いてゐるのが寧ろ氣の毒な程愛嬌があるけれども、書かれた者にとつては矢張り憎む可き記事であつた。

第一は『保険ロマンス』といふ題下に『此父にして此子』といふ標題で、例の廢嫡云々が噂に上つてゐる。その記事によると、或人が例の廢嫡問題を、我父に質問したといふのである。如何に父の齡は傾いたと雖も自分の四男を嫡男だと思ひ違へるわけが無い。然るに此の記事によると、父も亦その問題を事實起り得る

ものとして返答をしてゐるのである。記事の捏造である事は敢て論ずる迄もあまい。

もう一つは『閑話茶談』といふ題で身に覺えの無い艶種である。『三田派の新しい文士に水上瀧太郎といふのがあつた。それにカフェ・プランタンの(春の女)と(秋の女)が競争でラヴしてゐたことなどは文壇では夙に誰も知りつくしてゐたが、一般の世間はまだ餘り知つてゐない』といふ冒頭で、同じく廢嫡問題に言及し、最後に『それにつけても餘計なことだが、彼の派手な華やかな明るい感じを持つた(春の女)と寂しい静かなおとなしい(秋の女)は君の歸朝したことを知つてゐるかどうか、今は誰もその姿を見た者もない』と結んだ。

自分はカフェ・プランタンといふ家に足を踏入れたのは前後三回きりである。一體に日本のカフェに集る客の様子が、自分のやうな性分の者に、痛に障つて堪



らず、殊に一頃半熟の文學者に限つてカフェ邊りで、しだらなく酔拂ふの得意とした時代があつたが、そんなこんなで自分はカフェを好まない。プランタンといふ變な家もその開業當時友人に誘はれて、一緒に食事をした三回の記憶以外に何も無い。第一（春の女）（秋の女）などといふ女は當時はゐなかつた。これも亦自分は惚れられる権利を持つてゐないので、記事の捏造なる事は疑ひも無い。

驚く可き事は、初め憎むべき東京朝日新聞の記者の捏造した一記事が、それからそれと傳へられて、眞の水瀧太郎の外にもう一人外の水瀧太郎が人々の腦裡に實在性を持つて生れた事である。此の水瀧太郎は某家の嫡男で、その父と父の業を繼ぐか繼がないかといふ問題から不和を生じ、廢嫡になるかならないかといふ瀬戸際迄持つて來られた。勿論物語の主人公だから世にも稀なる才人である。新聞記者の語をかりて云へば天才といふものなのである。

ところが眞の水瀧太郎は新聞記者の傳へた都合のいゝ戯曲的场景の中に住んでゐなかつた。彼は天才でもなんでもない。彼はもつたない程その父にその母に愛されて成人した。彼が小説戯曲を書いて發表したのは事實である。しかも曾て文筆を持つて生活しようと考へた事は一度もなかつた。彼の持つて生れた性分として彼は、目に事無き事を愛し、平凡平調なる月給取の生活を子供の時から希望してゐた。勿論自分自身十分の富を有してゐたら月給取にもなり度くなかつたらう、恐らくは懐手して安逸を貪つたに違ひない。彼は落第したり、優等生になつたり出たらめな成績で終始しながら學校を卒業し、海外へ留學した。父が保險會社の社員だつたといふ事は彼の學ばんとする學問には何の影響をも持つてゐなかつた。父とも約束して、彼は經濟原論と社會學を學ぶつもりで洋行した。しかし學校の學問は面白くなかつた。學者となるべく彼はあまりに人生に情熱を



持ち過ぎてゐた。時にふと氣まぐれに保険の本を買ひ集めたり、圖書館へ通つて研究する事もあつた。しかしそれが彼の留學の目的ではなかつた。足かけ五年の年月の歐米滞在中彼が學んだ事は何であるかといふと、それは人間を愛する事と人間を憎む事である。最もはげしい愛憎のうちに見るゝ人間性を熱愛する意志と感情の育成に他ならない。彼は不幸にして他人を愛する事が出来なかつた。そのかはりにその父母兄弟姉妹を、自分自身よりももつと愛する嬉しい心をいだいて歸朝した。それだけの人間である。

自分は自分を第三者と見て、上述の如き記述をした。しかしその眞の自分を知つてゐる者は自分以外には數人の友人の外に誰もない事實を思ふと、流石に寒い心に堪へ難くなる。一度東京朝日新聞の奸諂邪惡憎む可き記者の爲に誤り傳へられてから、自分の目の前に開かれる世界は暗くなつた。或學者は人間の愛を説い

て、愛とは理解に他ならないといふ。それを愛の一部だとしか考へない自分も無理解の世界誤解の世界には生きてゐられない。見る人逢ふ人のすべてが、新聞によつて與へられた先入觀念で自分を見る世界が、自分にとつてどんなものであるか、恐らくは人をおとしいれる事を職とする憎む可き程淺薄低級なる新聞記者には理解出来まい。

自分を知らない人で、朝日その他の新聞の捏造記事を見た人は、殆どすべて彼の記事を眞實を語るものと思つたに違ひない。友だちの中にも、知己の中にも、『といふ聞くも忌はしい言葉を自分の姓名の上に附加された。打消しても打消しても、人は先入の誤解を忘れなかつた、甚しいのになると、自分に兄のある事を熟知してゐながら、尙且廢嫡問題が自分の身に起らんとしてゐるのだと考へる



粗忽な人も多かつた。否その粗忽な人ばかりだと云つてもいい程、人々は憎む可き記者の捏造の世界に引入れられてしまつた。たとへその記事を全部は信じなかつた人も、多少の疑念をいだいて自分を見るやうになつた。自分を見る世界の目はすべて、比良目の目になつてしまつた。幸にして自分は衣食に事缺かぬ有難い身の上であつたし、幸にして奉公口もあつたから、その點は無事であつたが、若しまかり間違つたら、此の如き記事によつて人は衣食の道をさへ求め難きに至る事は、想像出来ない事ではない。

幸にして自分は獨身生活を喜んでゐるから、その點は心配はなかつたが、假りに自分が配偶を探し求めてゐるとしたら、恐らくは廢嫡問題の爲に、世の中の娘持つ程の親は、二の足を踏んだに違ひない。

要するに自分は、世間の目から廢嫡問題の主人公としての外、偏見無しには見

られなくなつてしまつたのだ。多數の人間の集會の席に行くとき、あちらからもこちらからも、心無き人々の好奇心に輝く目ざしが自分の一身にそゝがれ、中には公然指さして私語する無禮な人間さへある。

如何に寛容な心を持ちたいと希ふ自分も、かかる世の中に身を置いては、どうしても神経の苛立つ事を止めかねた。どいつも此奴も癪に障ると思はないではゐられなくなる。さうして自分は一日と雖も、新聞記者を憎む事を忘れる事が出来なくなつた。

自分は決して新聞記者を、社會の木鐸だなどとは考へてゐないが、彼等が此の人間の形造る社會の出來事の報告者であるといふ職分を尊いものだと思ふのである。然るに憎む可き賤民は事實の報告を第二にして、最も挑發的な記事の捏造にのみ腐心してゐる。さうして新聞記者といふものに對して適當なる原因の無い恐



怖をいだいてゐる世間の人々は、彼等に對して正當の主張をする事をさへ憚つてゐて、相手が新聞記者だから泣寐入のほかはないと、二言目には云ふのである。それをいゝ事にして強もてにもてゐる下劣なるごろつきを自分は徹頭徹尾憎み度い。同時にこれらの下劣なるごろつきの日常爲しつゝある悪行を、寧ろ獎勵してゐる新聞社主の如きも人間社會に對する無責任の點から考へれば、著しく下劣なる賤民である。自分は單に自分自身迷惑した場合を擧げて世に訴へようとするのではない。それよりも一般の社會に惡を憎み、これに制裁を加へる事を要求鼓吹し度いのだ。

根も葉も無い捏造記事の爲に、幾多の家庭の平和を害し、幾多の人の社會生活を不愉快にし、幾多の人の種々の幸福を奪ふ彼等の行爲を世間は何故に許して置くのか。

繰返して云ふ。自分は新聞記者を心底から憎む。馬鹿馬鹿馬鹿ツ。その面上に唾して踏み躪つてやる心持で、この一文を草したのである。(大正六年十二月十七日)



『八千代集』を讀む



岡田夫人から『八千代集』を頂いた。

ひと昔前の事、自分がまだ中學の時代に、如何いふ心持で讀んだのか忘れてしまつたが、小山内薫氏の『夢見草』と、小山内八千代さんの『門の草』といふ文集を、常に机の上に置く十數冊の詩歌集と一緒に並べて持つてゐた。ヲサナイと呼ぶ事を知らずにコヤマウチだと思つてゐた。小山内氏兄妹が、泉鏡花先生の作品の愛讀者であり且研究者だといふ事を、ある雑誌で承知して、その爲に買った二冊だつたかと思ふ。本の装幀が美しかつたのと、若い兄妹が揃つて文筆に親しんでゐるといふ事が、當時の自分には羨しくも懐しくも思はれたのである。當今思ひつき専門の雑誌が、有島兄弟號谷崎兄弟號長田兄弟號を出し、物好きな世



開がそれに釣られる心持を、自分は自分自身持つてゐる事を拒め無い。

『夢見草』は今も自分の本箱の中にあるが、『門の草』は何時かしら古本屋にでも賣拂つたのであらう、自分の手もとには無くなつた。

いろ／＼の美しい文章が集めてあつたが、それがどんなものだつたか今では全く覚えてゐない。夜寒の門の外で小犬の啼いてゐる景色が、その文集の何處かにあつたやうに思ふがあてにはならない。女の子が集つて、おはじきをしてゐる景色も、おぼろげながら記憶してゐるが、それとてもそれつきりで、後も前もまるで忘れてしまつた。たゞ自分が幼い憧憬をもつて『門の草』を讀んだといふ、自分自身を回顧して懐しむ心地ばかりが忘れられないのである。

その後『新緑』といふ新派の俳優の話も、誰は誰をモデルにしたのだといふやうな極めて安値な興味から自分を誘つたが、僅かに前篇を讀んだだけで止めてし

まつた、後年久保田萬太郎氏がしきりに此の小説を推稱するのを聞いたが、それは役者好きの久保田氏の事だから、役者の生活を描いた小説をほめるのか、でなければ久保田氏は岡田夫人が最負なのでほめるのだと、たかをくゝつて讀まなかつた。雑誌や新聞に出た夫人の作品は随分澤山讀んだ筈だけれど、あんまり感心しなかつたと見えて、殆んどひとつとして記憶に残つてゐるものも無い。

それなのに今度『八千代集』を讀んで、かなり面白く思ひ、集中の多くの作品は大概二度三度繰返した。夫人からその集を頂いた時、自分は發熱して病牀にあつた。なぐさまぬ心が大層なぐさめられた。本を頂いた禮状にかへて、自分は主として自分の好惡から出た、讀後の感想を、聊か引延して茲に記し度いと思ふ。序にかへた『鳥のなげき』といふ詩——詩と呼ぶ外に何か適當で、且もう少し安つばい輕蔑した言葉があれば、喜んでいひかへる——を先づ讀んで不愉快な氣



持がした。自分の推察が間違つてゐたら謝る外は無いが、想ふに此の詩によつて、作者は自分の境遇を、暗にうたひ嘆いたのであらう。序にかへてと斷つてゐるのをみても、少くとも作者の一時代の心狀を現したものと見て差支へ無いやうに思ふ。無理解の周圍の中に生活する事は、吾々にとつて最も悲しい事であるが「鳥のなげき」の浮ついた氣障ないひあらはしは、その悲しみを賣物にしてゐるやうな推察を起させる。その點に於て自分は、此の「鳥のなげき」にかへて、どんな序文でもいゝから別のものであつてくれゝばよかつたと思ふ。

「八千代集」中、自分が一番面白いと思つたのは、巻頭の「紅雀」である。茲に面白いといふのは、それが藝術品として勝れてゐるといふ意味では無い。自分を以て種々の事を考へさせた點を指すのである。若しも一の作品に規ひどころといふものがあれば——内容といふ廣い意味の言葉を用ゐるよりも、稍々狹義で且聊

か不純な意味を持つ規ひどころといふ言葉を特に用ゐる——此の作品は、その規ひどころに於て極めて勝れたものであると同時に、それを一篇の藝術品として形造る形式に於ては、最も拙劣であつた。

一人の青年は、死なばもろともにと誓つた従妹に死に遅れ、死なう死なうと思ひながら生きながらへてゐるうちに、何時しか他の女に戀してしまふ。けれども死んだ従妹との誓に對する良心の悩みから、今戀ふる女にはその戀をなか／＼うちあけかねたが、遂にそれをうちあけると、女も亦女自身、或他の人に對してうちあけぬ戀を胸に秘めてゐる事をうちあける。傍に第三者の態度でゐた主人と呼ばれる青年は、此の二人の告白を聞いてみると、自分の友の青年が戀しあつて、死ぬ時と共に誓つた従妹といふのは、曾て自分に戀してゐた女であり、今又その惱ましき同じ人が戀してゐるといふ女は、自分自身戀しく思つてゐると同時



に、初めて聞いた女の告白によれば女も亦自分を戀してゐるのであつた。  
「紅雀」の中の二人の男と二人の女——一人は死んでしまつたが——の戀愛關係を最も簡単に紹介すれば右の如きものであるが、これ丈でも此の作が、如何によき戯曲の素材であるかを、人々は直に想像する事が出来るであらう。岡田夫人が此の一篇を小説の形式によらず、戯曲の形式で描いたなら、必ず勝れたものが出来たらうと思ふ。その理由は、平面的の描寫で現すよりも、もつと緊縮した立體的の舞臺藝術が、この材料には當然適合する性質のものだといふ一言に盡されてゐる。換言すれば人と人との關係が、長い時間を経過して發展して來るのとは反對に、瞬間的に披瀝されるところが、それを表面では表現し憎いものにしてゐるといふのである。

一體に、吾々日本人は、舞臺に繪畫を展開する技倆には勝れてゐるが、戯曲ら

しい戯曲を組立てる事は、今日の所謂新しい戯曲家に於ても最も不得意とするところである。或は、本來戯曲らしい戯曲を構成する能力が無ければかりで無く、戯曲らしい戯曲の材料を掴む能方さへ無いと云ふ方が適當かもしれない。

それなのに此の一篇は、稀に見る戯曲的なもので、自分が『八千代集』中一番興味を覺えたのも、全然この特質の爲である。正直なところ、自分は近頃戯曲を書く人の中で、これ丈戯曲的な人間關係を、時間と場所の適確なる一致に於て描き出した人を外には知らない。兎角女といふと馬鹿にしたくなる傾向を持つ自分も、この作を読んだ時は、これは馬鹿には出來ないと思つた。けれども不幸にして岡田夫人は、此の戯曲的の場面を把握しながら、心なくも小説の形式で書いた上に、その小説も新派の芝居好み、活人畫の背景好みの、有平糖の綺麗さで飾り立てた極めて感傷的なものにしてしまつた。作者の持つてゐる惡趣味が、鮮明に出てし



まつたのだらうか。

時は春『うす紫にうち煙つた朧月夜』で『風も無いのに眞白に咲き満ちた櫻の梢からは、音も無く花片が、ひらひらひら——ひらひらとしつきりなしに』散りかゝるといふやうな婦人向の、極めて通俗に美しいと呼べるべき景色である。人物も亦不幸にして、安本龜八作の好い男二人と、その二人と肩を並べても見劣りのしない丈の高い、『うるみを持つた大きな眼が、物云はぬ先に云ひしれぬ氣高い情を語る』婦人である。

自分には、この二青年が、どう考へても、その脱線した服装、その輕薄な言葉つき、その淺薄な論理から推して、新派の芝居の色男以上には踏めない。新派の芝居の色男といふのは、言葉を換へて云へば、自分ではいゝ男のつもりで、その實氣障で間抜けな男の事なのである。しかもその青年の服装其他を、作者は十分

の好意を以て描いた調子が歴然と見えるのは遺憾である。

二人とも『銀鼠色のルバシユカ』『紺のピロオドの洋袴』といふ、想像する丈でも失笑を禁じ得ないみなりをしてゐる。巴里の一隅に巢をくつてゐる露西亞猶太人や、バルカン半島邊から出て來た下手な畫學生などの中に、たま／＼つぎだらけのルバシユカを着たのや、古び汚れたピロオドの洋袴を穿いたのなどを見ると漫畫のやうな趣致を感じるが、小ざつぱりしたルバシユカに、新調のピロオドの洋袴で、いゝ男の坊ちやん畫工が、とりすましてゐる様子は、天長節の夜會に出る洋装の日本婦人、赤十字社の大會に集る片田舎の村長のフロツク・コオトよりも、もつと悲惨な可笑しさを覺える。もつとも、銀座邊をいゝ氣になつて、そんな風をして歩いてゐる所謂藝術家も時々は見受るから、或はそれも別段をかしがられもしないで通用してゐるのかもしれないが、何にしても作者の爲に、又この



小説を安値にした結果の爲に、自分は此の二青年の服装を忌々しく思はないでは  
ゐられない。

會て歐羅巴の都で、ピロオドの服を着て得意がつた日本の藝術家が、或商店に  
買物に行つて、乞食と間違へられた噂を聞いた。又或日本の藝術家はルバシユカ  
を着て巴里の町を歩かうとしたので、その友人達が言葉を盡して反對し、やうや  
く思ひ止らせたといふ話があつた。面白い挿話として茲に記す。

其の上に又「紅雀」の人々は自稱して江戸ツ子がる、よくある一派の所謂藝術家  
である。主人の青年の口をかりて出る樂天的な江戸がりに耳を傾けると、世に謂  
ふ所の江戸ツ子の最も悪い方面ばかりを、最もいゝ性質として、作者は描いてゐ  
るかのやうに推察され、又しても残念に思ふのである。一體、世間普通に適用す  
る江戸ツ子といふものゝ觀念には、かういふ冷汗の出るやうなのが勢力を持つて

ゐるのだらうし、實際東京の人間には、多少いやな浮調子なところもある事は否  
めないが、自分のやうに極端に東京の人間の好きなものにとつては、かゝる種類  
の人間を江戸ツ子と呼ばれるのは苦痛である。正直のところ自分は、はきちがひ  
の江戸ツ子ガリの横行の爲か、近頃は江戸ツ子といふ言葉をきくと、前後の判断  
も無く、直に侮蔑の念を抱くやうにさへされてしまつた。

自分は「紅雀」が、立派な戯曲を構成すべき素質を備へながら、あまり出来栄の  
勝れない小説となつてしまつた事を残念に思へば思ふ丈、その小説としての價値  
を殊に安値にした作者の悪趣味を罵倒し度い。この自分が、甚だ強く感じた感嘆  
と残念とは、覘ひどころに於て秀拔で、小道具と背景、その他の外面的要件に於  
て劣悪な「紅雀」の持つ不思議に混亂した興味に誘はれて、二度も三度も繰返して  
讀ませた。



「夢子」といふ小説は、その主人公夢子の數奇な運命が、異國趣味に似た面白さを持つてゐる。殆ど神祕の國の城の中を覗くやうな冒頭の生ひ立ちの記の數頁と、その城の姫の寵愛を一身に集めた身が、父の死の爲に雨露をしのぐ處さへ無くなつて、西の都を去る邊の、豊富な挿話を持つ半生の物語は、全く外國の物語に空想をそゝられて、未知の郷土を憧憬する幼時の心持に自分を誘惑した。殊に前半の簡明でしかも行届いた文章は、大ざつばな心持で虚喝胴喝を事とする、當時流行の作家などの到底及ばない正當な文章である。その上に、兎角綺麗事になりたがる嫌ひのある此作者としては、きびくと力に充ちてゐる事も感嘆に値する。けれどもそれは物語に特有の面白さである。描かれた事そのものが、直ちに實在性を帯びて吾々に迫るのではなくて、その物語が引起す吾々の心持に、より多く頼るべき性質の興味である。従て主人公が、流轉の身を東京に落著けた時から始

まる昨日に變る生活を描いた處になつて、作者が物語の筆を捨て、寫實的描寫を專一に爲始めると、全く異國趣味は消えてしまつて、殆ど別の小説を讀むやうな氣になつて來た。同時に作者は、夢子その人の人の心持にも、回顧的に書いた前半とは違つて、細かい洞察と温い同情を缺いてゐる。さうして此の破綻が一篇の小説を前半と後半と別々の物にしてしまつて、一貫して變らない興味を失ふ原因になつた。

立入つた話ではあるが、技巧の問題として希望すれば、夫人は此の小説を全く會話抜きで描くべき位置にあつたのだと思ふ。それが夫人の力量に最適の形式だつたやうに考へられる。さうでなければ、種々の境遇の變化の中に現れる主人公の性格を強調した心理描寫の筆を揮ふべきであつたと思ふが、浮雲の如く去來する心持は描けても、より深く根ざす心理の描寫は夫人の最も不得手とするところ



ろであるから、これは無理な注文として差控へるのが至當であらう。

話は變るが自分には、夢子の意地張りなところを作者が非常に買つてゐるのが面白かつた。

「餘計者」も亦冒頭の朝子といふ女主人公が、その親、兄、姉にさへ餘計者にされたつきの悪い子だつた生ひ立ちを描いたところが勝れていゝ。讀み出した時、これは立派な小説に遠ひ無いと思つた。けれども「夢子」の場合と同じく、現在を描いたところになると、全く調子が狂つて、何の爲にあんな堂々たる生ひ立ちの記が必要だつたのかわからなくなつた。女が夫の家を出る動機とか、その夫との關係、その家の状態、殊に朝子その人のなぐさまぬ心狀が、一切不明瞭である。若し朝子とその幼時の如く餘計者であるならば、その餘計者である事と、家を出てからの行爲との間に原因結果の關係が無ければ、折角立派な生ひ立ちの記も無用

の贅物に過ぎない。

例によつて憶測を逞しくすると、作者は事實の興味に乗せられて、それ程でも無い事を一大事として取扱つたのではあるまいか。少くとも自分には、内には激しい苦悶不満に悩み、外には不愉快な境遇の壓迫に苦しんでゐる男女とは思はれなかつた、殊に翼といふ男は、作者が好意を以て描かうとした人間とは全然別種の人間としか考へられない。茲に作者が描かうとした人間とは即ち朝子の信じる翼だと云つても差支へあるまい。朝子は翼をトルストイの小説「復活」の主人公ネフリュドフに比べてゐる。「あのネフリュドフの眞似の出来るのは翼一人だと思つた。翼ならシベリヤまで行く位何でもなく思ふであらう。」と云つてゐる。けれども吾々が此の小説に描かれた丈で見ると、翼は「戀にやぶれ、商法に破れ、遂にみづから掛けたわなにみづから掛つて苦しんでゐながら、それをも強ひて抜け



ようとはしないで、苦しめる丈苦しまうといふやうな男」と呼ばれる際の悲壯な男ではない。彼れは戀に破れたかもしれない。しかしそれは幾多の浮氣な男がしくじつた戀と何處に相違があるのか。「ふとしたことから關係した女」と夫婦になることにも、何んの悔恨も伴はない男としか考へられない男の戀の失敗は、やがて彼が座興として人々にはこり得る程度のものに過ぎない。彼は「苦しめる丈苦しまう」としてゐるのではない。「なりゆきに任して進んでゆくより外に道はない。」といふ、持つて生れた極めて樂天的な考へから、懷疑的な反省的な人間ならば苦痛とする事さへ苦痛でなく過して行ける人間なのだ。ネフリエドフには良心の苛責があり、道德的倫理的思索反省が常にあつた。彼がシベリヤ迄もゆかないればならなかつたのはその爲である。翼には道德感は無いのだ。彼がなりゆきに任して、呑氣な顔をしてゐられるのはその爲である。ネフリエドフが、どんな

若しみをも苦しまうとした心には、彼の道德的意力の伴つてゐる事を忘れてはならない。翼がどんな事も苦にならないのは、彼には何らの道念がなかつたからである。

自分は、トルストイのネフリエドフに、かゝる男を比較されたのを見て、失笑を禁じる事が出来なかつた。さうして作者が此の小説に失敗したのは、つまらぬ男女の氣まぐれを、さも悲劇らしく買ひかぶつた結果だと推論した。

ちひさな事を大げさに考へる事、あんまりしつこい物にも倦きたからお茶漬にしやうといふやうな軽い事を、せつばつまつた事のやうに考へる内容の不充實が、此の比較的長い、當然複雑な背景を要求する小説を、平淡無味なものにしてしまつた。

たゞ面白いと思ふのは、意地張りの我儘者に對する作者の同情が、露骨に出て



あるところである。甚だ失禮な申状だが、想ふに岡田夫人は意地張りの我儘者であらう、さうしてその爲に餘計者にされる不満と哀愁を、時に泌々感じる人であらう。その哀愁の伴ふ時、夫人は「餘計者」の冒頭數頁が持つやうな緊張した描寫を可能にし、その憤懣のみが堪へ難く荒ぶ時、やけになる心地を夫人は切實に感じる人であらう。かゝる時、夫人は此の小説の朝子の心を經驗するのではな

いだらうか。

やけといへば、一體に夫人の作品には、何處かに捨鉢を喜ぶ傾向が顯はれる。それは捨鉢を主張したものでなく、捨鉢に同情してゐるのでも無い。殆んど無意識に作品の基調を成してゐるのである。それ丈動かし難いものに思はれる。若し此の捨鉢が一層強く深く、色彩を鮮明にして來る日があつたら、夫人の作品には更に遙に純一性を増すに違ひ無い。

「餘計者」の朝子が家出に至る迄の心状は、正面からも、又は背景としても、殆ど描かれずに終つてしまつたが、要するに一切の事になぐさまぬ心がその原因をなしてゐるのであらう。そのなぐさまぬ心、その爲に世を捨鉢の氣まぐれともなる心持は、「青い帽子」及び「假裝」の中に共に現れる二人の女にも見出される。この二人の女は不愉快な新聞語を以て呼べば、所謂新しい女であらう。自分のやうな、女性に對しては、自分自身、主我的な要求から、寧ろ古めかしい優しさを強要する傾向の者には、反感を持たないではゐられない種類の女である。勿論茲に新しい女とは、新聞記者の理解する丈の意味に於ての新しい女で、決してよき意味に於ける進歩した女を意味するのでは無い。殊にこの二人、即ち朝子とつね子とは、決してその思想に於て新しい女ではなく、ただ單に行爲の上に、慣習を破壊したあばずれが現れてゐる際の女なのである。兎に角今此の小説の中では、



二人は何か心も躍るやうな刺戟に憧れ悩んでゐる事は確かである。「青い帽子」に於ては、夫人の「得意」とする細緻な観察をほしいまゝにした端艇競争の場景の中に明確に描かれてゐる。うまいと思つた。しかも自分の我儘は、この二人の女の態度の小憎らしさから、この作品を好む事が出来なかつた。作者が彼等の態度を是認してゐるところが、自分を不快にしたのかもしれない。「假裝」の方は散文詩のやうな感觸を持つ小品で、主としてその作品を貫くかしの、やるせないやうな心持には自分は同感する事が出来た。或時の人の心の動搖をとらへたものとして、極めて氣の利いた作品であるが、あまりに形式を氣にしたわざと、しさがいやだ。右の二篇の中の一つね子といふ女は、作者がより多く同情してゐるかしのよりも、爲す事する事が付焼刃で堪らなく「いやな奴」である。しかしその「いやな奴」よりも、明かに「いやな奴」として描かれたのは「灯」の夏子である。しかも自分

には此の「いやな奴」の方が、つね子といふ「いやな奴」よりは、まだしもましに思はれる。それは作者がつね子に對してはその行爲に反感を持たず、寧ろそれを肯定しながら、夏子の態度は一々否定してゐるのが、かへつて吾々をして前者に反感を抱かせるのではないだらうか。つまらない事のやうだけれど、描寫論の一端として、心得べき事に思はれる。

作者が明白に「いやな奴」として取扱つてゐる夏子に對して、作者が明白に最負にしてゐる千の助は、複雑な陰影の多い半生を背景にした人らしく所々に説明されてゐながら、結局その心持は極めて淡くしか推察されない。勿論作品の性質が寫生風のものであるから、それに對して廣い背景を要求するのは無理かもしれないが、一體に夫人の作品には、背景の浅い恨みがあるので、ついでを借りて云ひ度いのである。そのかはり、此の夏の夕の一挿話は、平淡に描かれてゐる丈明



るい色彩で、男も女も當代の浮世繪のやうに生々とした刺戟性を持つて印象を殘すのである。好きではないけれど、この點に於てうまい作品には違ひない。

うまいといふ方から行くと『雨』『お伊勢』『駒鳥』などは議論無しに推稱さるべき作品である。かういふ作品にあらはれる夫人の特質は、觀察描寫共に細緻な事である。規模の大きい或事件の進展を描いた他の小説には、夫人の最も不得意らしい心理描寫性格描寫の極めて粗雑な事が明確に觀取されるのに、これらの短篇中の短篇にはさういふ要素を比較的に必要な爲に、無瑕の寶玉の光を帯びてゐる。夫人は人の心の深い動搖、變化、展開を描く事には拙劣だが、成一瞬時の心の浮動は、極めて親切丁寧に同情深く描き出す。自分が推稱する作品中の『お伊勢』『駒鳥』などは正にこの好適例である。

『雨』に至つては『八千代集』中最も短いものではあるが、同時に最も完全な短篇

として第一に推讚し度い。夫人の寫生家としての冴えた手腕が、他の作品では兎もすると、押へても押へ切れない夫人特有の片意地や、あて氣や、山氣に邪魔されて、本來の光を現さないのが、此處では立派な作品を成し、しかも藝術家に有勝の芝居氣のまじらない純粹の人の愛が、一字一句に籠つてゐて、幾度繰返して讀んで見ても、自分は歡喜に伴ふ涙ぐましい程の心地を覺えるのである。ふと乗合せた電車の中の姉弟の、その境遇性格、全生涯迄も、僅に數頁の文字の中に暗示されてゐるばかりで無く、もつと廣い人間社會が、その背後に横たはる事さへ歴然と示されてゐるのである。集中最も完全な作品であると同時に、波瀾に富んだ長篇よりも、遙に深みのある作品である。靜止せる場合を描いて、尙且動いて止まない人生の一角をまぎ／＼と見せた逸品である。紅葉時代の文脈を引いた誇張の無い氣持のいゝ夫人の文體は、此作に於て、初めてしつくりあてはまつたや



うな氣がした。自己を語るには、思想を適確に把握し得ない恨みがあり、自己を描くには、あまりに筆の弱過る嫌ひのある夫人は、要するにその持前の細かい觀察に、女性特有の温い同情の伴つた時、寫生家——寫實主義者といふ文字の與へる概念と異なると同時に、ホト、ギスの所謂寫生文を書く人とも違ふ意味で——としての本來の技能が最も自然に發露して、かゝる逸品を創作し得るのではなうだらうか。敢て夫人が今後の筆硯の爲に、自分は押切つた事を云ひ添へるのである。

『雨』と並べて、自分が最も愛讀したのは『うつぎ』である。一體に他の作品の多くに見えるあまり感心しない趣味と、かなり力強く働いてゐる芝居氣から、此作品は全然免れて、極めて自然なのが、自分をして幾度も繰返して讀ませた所以である。

元來どの作家でも、追憶回想の作品には、不知不識詠嘆的になり勝であるが、意力の強い夫人は、全然この弱點を見せずに、飽迄客觀的な態度を持し、しかも面白い挿話のひとつひとつを繪巻物のやうに展開した。殊に一人稱の叙述に似せやらず、作中の人のすべてが、何れも截然とした特色を持つ個々の性格として躍動してゐるのは敬服に値する。さうしてその個々の人々の一生及び相互の關係迄吾々は頭を痛める事なく覗ふ事が出来る。こゝにも亦夫人の寫生家としての特質と、その柔かい色彩と、その靜に寂しい韻律を持つ極めて上品な夫人の文章を持つし度い。

凡そ多くの作家にとつて、最懐しい作品は、その構想表現に工風を凝らした作品ではなく、極めて自然に自分の心胸に泉の如く湧き上る感情を、そのまゝ筆にした作品であらう。其處には歴々心ある作家が、自ら冷汗を覺える小細工、脅



迫、虚偽が無い。恐らくは夫人が自己の作品中最も自らなつかしとするものは「うつぎ」以外にあるまいと思ふ。

「うつぎ」に比べると、同じやうな味ひを多分に持ちながら、比較的劣るのは「指輪」である。これは事實の面白さを羅列する忙しさに、作者の理解同情が、物語らるゝ事象の中に、滲透し切れなかつた結果であらう。しかしそれも「うつぎ」に比べての事で、他の作品の中では、矢張り自分の好む物のひとつに數へて憚らない。

自分が最もつまらない、馬鹿々々しい作品だと思つたのは「横町の光氏」である。低級子女が見て光氏とする横町の若い人を、夫人も亦同じ程度に肯定してゐるのが馬鹿々々しい。且その門の口吻の氣障な事は、當然カリカチュアとして現さるべきであつたと思ふ。こゝに又不幸にして夫人の悪趣味の流露を見た。

「堂島表」も「横町の光氏」に見る同じいやみを感じるけれど、この方は作品としての纏りのいゝ事が、彼に比して遙に勝つてゐる。

「鷹の夢」は久保田萬太郎氏が、岡田夫人の噂が出ると、必ず「新緑」と共に引張り出して、誇大に感服して見せる作品であるが、それはたまく久保田萬太郎氏の淡い趣致を喜ぶ獨特の好みを表白したものと、久保田氏を評する時により多く面白い證明のよすがとなる可き話で、作品としては可も無く不可も無い、極めて平凡なものだと思ふ。

自分は最後に、上來述べて来たところを綜合して、夫人の作品の特質傾向及び夫人の作品の弱點短所を簡略に抽出し度いと思つてゐたが、それはこゝ迄の長々しい批評の中に断片的ながら云ひ盡されて居るやうに考へられるのでやめる事にした。



或文壇の老大家が會て人に語つて「俺は女の書いた物は何でも面白い。女の書いた物だと思ふと悪口は云へない。」と云つたといふ巷の噂を聞いた事がある。けれども明治大正にかけて、吾々の時代が生んだ女流作家中、歌人與謝野晶子氏と小説家樋口一葉女史以外に、無條件に推讃し得る人が何處にあるか。殆んどすべての女流作家は、單に女だといふ先天性の爲に、文壇の色どりとして介在してゐるに過ぎない。たまく野上彌生、中條百合子二氏の如き、かなりいゝ素質を持つてゐるらしい人が現れても、自制心の缺乏から、中途にして邪路に路入つてしまふ時、同じくよき素質を持ちながら、多年創作の筆を續けながら、尙且自己の特質を自覺しないらしい岡田夫人を惜しいと思ふ。

あまり度々引合ひに出して濟まないが、久保田萬太郎氏の如きは、今日迄の岡田夫人の作品を見ても、夫人は現代女流作家中唯一の勝れた作家だと云つてゐる

が、自分は左程に思はない。しかし夫人が今後ほんとに自己の持つてゐるいゝ物を見出し、しつかりとそれを把握した時、必ず勝れたる作品を發表されるに違ひないと、確く信じて疑はない。

乍末岡田夫人の「八千代集」を贈つて下さつた厚情を感謝し、併せて夫人の健康を祈りつゝ筆ををく。(大正七年四月二日)



愚者の鼻息



人をつかまへて親切めかして忠告するのは、人をつかまへて無責任に罵倒するのと同じ位いい氣持なものである。

これは自分の座右の銘では無い。大正七年二月深川區猿江町吉村忠雄と封筒には署名し、半紙七枚に鐵筆で細かく書いた「水上瀧太郎君に與ふ」といふ文章に次郎生と名告つた人から難詰状を受取つた時に、ふと自分の腦裡に浮んだ安價なる詭辯である。

吉村忠雄氏事次郎生、若しくは次郎生事吉村忠雄氏、或はもつと正確にいへば吉村忠雄及次郎生事某氏は、

瀧太郎君足下



余は君とは昵近の間柄のものである。否猶り君のみとは言はず君の一族同胞には格別なる近親の者である——君の生立や両親や乃至は平常生活から家庭に於ける起居皆一々手に取る如く知り抜いて居るものゝ一人である。ではあるが君が文學に興味を持つて居る、文才に長けて居るといふ事を他人から聞き傳へたり紙上で見たりしたのは比較的後の事に屬するのである。それは何故かといふに君が筆を執る際は必ず姓名共に別名を用ひて居ること、も一つは余が餘りに君とは近親であるから平常君が文學書など繕いて居るのを知つて居ても、所謂文士仲間には左や右う言はれる程では勿論ないし、猶又何に彼の子供が——と云ふ觀念が生入主となつて居た事とが、余の君の文才を知ることの後れた主たる原因であると申したい。と書出して、扱てその人は自分が「所謂文士の仲間入りをして居る」事を知り、

彼の子供が何んな事を書くだらうとか、どんな文藝上の手腕をもつて居んだらうとか、或は題材は何んなものを捉へるだらうとか、それはそれは余の君に對する期待は蓋し豫想外に大きなものであつたのである。と稱してゐる。而して御苦勞様にも「多忙な身ではあるが三田文學に出た作品は一つ残らず讀み」、先頃大阪毎日及び東京日日新聞に連載された「先生」といふ小品も毎日缺かさず讀んだのださうである。けれども、余の期待の餘りに大き過ぎた爲であつたか、或は又余の文學に對する眼識が偏狭であるかは知らぬが、左程までに大なりし余の期待は君の作品を漁り行くに従つて次第々々に薄れて、果ては大なる失望と化し去つたのである。特に「先生」の一篇を見てからは更に其感を深くした次第である。と殘念がつてゐる。



以上が吉村忠雄氏又は次郎生の『水上瀧太郎君に與ふ』のはしがきで、自分及び自分の家をよく知つてゐて、水上瀧太郎を『なんの彼の子供が』と思つてゐると稱する大人は、次の如き詰問と慢罵に移つて行つた。

瀧太郎君足下

余は勿論君とは生活状態も違ふし、文藝に就いて彼是れ議論を戦はす程の素養を持つては居らぬ。

が少し君に尋ねて見度いと思ふ事がある。それは外ではない、文藝の價值といふ事である。それも總括的に文藝其物に就てでなく新聞紙の如きあらゆる階級に——階級といつても上下卑賤を指のではない、主として文藝を解する解せないを標準としてである——に接する機關に公表する場合の者をいふのである。余は斯うした場合の價值は其作品即ち小説なり隨筆なりが一般讀者の感興を惹こ

との多少と、勸善懲惡な誘導力の多少とに由り決するものと思考するものである。そして此點が文藝雜誌などにて發表する場合と違ふ事と思ふのである。君は之に關し如何様な意見を持つて居らるか御高見を伺ひ度い。余は後者に於ては其讀者が前者の夫とは違ふし、又後者其物の天職も前者とは違ふ。同じ『先生』でも後者にはあれでも宜いか知れぬが前者には不向なものと思ふ。單に不向な許りでなく第一物になつちや居ない余は彼れを讀んで何等の感興を催さなかつた。

これは吉村忠雄氏又は次郎生の文藝觀で、如何に大人といふものは頭腦の惡るものであるかを證明してゐる。最初に『彼是議論を討かはす程の素養も持つては居らぬ』と公言してはゐるものゝ、續いて自己の文藝觀を説いて相手方の意見を伺ひ度いと云つてゐるのは、即ち『彼之議論を討かはし』度いのであつて『素



養も持つて居らぬ」といふのは單に自らを低くし得たりとする習慣的禮儀に過ぎないので、實は存外自分の功利的文藝觀に満足してゐるのである。かうして自分の立場を明かにして置いて、吉村忠雄氏又は次郎生は「先生」の一篇に對して批評を下した。

恐らく余ばかりでなくああいふ書きなぐり物では天下の人皆さうであらう、先生は天下の人の認めて、以て偉人とする偉人である。さういふ人の平素の洒落な處を寫さう偉なる言行を寫さうとするならば、もつと讀者の興味をそそり深刻なる印象を頭に殘す様なものでなければならぬと思ふ。彼の作は此點に於て先づ全然失敗して居るものではなからうか、即ち題材としての平素の言行の取り方が當を得て居ない。迅きこと風の如きものの後には動かざること巖の如きものを、靜なること林の如きものの後には波瀾幾千丈といった風のも

のを配するとか坦々でなく紆餘曲折端睨すべからざる中に偉人の倂を偲ぶといふ風にするのが眞に是れ偉人を偉人として遇し、讀者の興味を彌が上にも湧き立たせ、且つは後世の人々をして其倂を偲ばしむる眞の方法ではあるまいか、文筆の炳乎日月の如く後世を照らすとは實に此事を言つたものではなからうか。或は足下は言はん、先生は然る波瀾に富んだ性行の人ではなく、世に平凡なる偉人と言はれし通り願ふ常識の發達せる平凡なる人であつたと。併し足下よ言ふ勿れ、當時は吾國開闢以來の思想の動搖轉換期にして實に先生は其の先唱者にして又中心點なりしなり。其の言行や奇抜にして當時の人にしては奇想天外より落つるといふ様なことばかりされた人である。

君の「先生」に對して詳密なる批評を下すといふことは又他日に譲るとしよう。茲では單に何等讀者に感興を起させない作は價値に乏しいものである。そ



して君の「先生」は正しく斯る種類のものであると云ふに止めて置き度い。

此の一節は吉村忠雄氏又は次郎生が、最もいい氣持で書いたものらしく、陳腐な形容詞を澤山持ち出して、見當違ひの議論を吹掛けてゐるところは、近代の文章特に「先生」の鼓吹したやうな進んだ文章に馴れた若い者には、到底吹出さな

いでは讀めない程愛嬌に富んでゐる。自分は非常なる興味を以て讀んだ。若しも低級なる興味でも敢へて構はず、讀む者を面白がらせるのが文章の第一義だと吉村忠雄氏又は次郎生が考へてゐるならば、期せずして人を失笑せしめし氏の文章なども「炳乎日月の如く後世を照らす」種類のものかもしれない。

次に吉村忠雄氏又は次郎生は、自分に忠告して左の如く述べてゐる。故意か粗忽か今度、  
瀧太郎足下

と君の一字が無くなつてしまつた。

夫れから次に一つ御尋ねしたいのは君が文章に親んで居られるのはあれは好きからに弄んで居られるのか、或は本職的に没頭されて居るのか、余は何れでも宜しいのであるが、右とか左とかそれに依つて些か注文があるのである。強ち君に對して興味を棄てよと云ふのではないが、内々に好きからに筆を執つて楽しんで居るといふのならば餘り駄作は公表せぬが宜ではないか、些か自ら文筆に得意なといふので鼻にかけるのは宜ろしくない。時々創作物を可然先生なり先輩なりに添削して貰つて楽しんで居ればよい譯である。何も公表して見せびらかす必要はあるまい。それから本職として居るといふならば誠に情けないことだと思ふ。先きにも一寸述べた通り世間で右や左う云ふからどんなかと思つて居たらまだあんなものを書いて居る！五年も七年も其途に親んで居て夫



れでまだ彼れ位のものだとすれば一層の事止した方が宜しからう。それよりも君が専門に修めたものでも確乎とやつたが何れ位國家を益するか知れやせぬ。二兎を追へば一兎をも得ずで兩方とも半嚙りになつてしまふ。

君が先年笈を海外に負ひたるも何の爲であつたか、徒らに「汽車の旅」を書く爲ではなかつたらう。必ずや其修め得た處のものを以て大に活動せんが爲めであつたらう。今や國事は日々に多端で三文文士の御託を聞くよりも一人でも多くの實際家を必要として居る。思想界の如きは少數の天才肌の人に任して置けば宜しい。趣味を持つて居るとか多少の文才があるとか云つて、レベル若くはレベルより稍々上へ出た位の者が吾も吾もとウヨウヨ集まる必要はない。思想界の明星となつて國民を左右するのも宜いが、目下の急務はハンマアを能く使ふ人を國家はより多く要望して居る。思想界の中でも君のは小説や隨筆の

様なもので目下大して缺乏して居るものでもない。論旨は益々亂暴になつて、攻撃されて居る筈の自分は寧ろ喜劇を見てゐるやうな笑ひを止める事が出来ないのである。

瀧太郎君足下

第三に君に尋ねたいのは君の文藝名である。多くの所謂文士と稱するものは大概皆名前だけ雅號様のものを用ひて居るのに君は姓までも變へて居る。彼れは何故本姓ではいけないのか、あれは法律で名前だけにしろと定めてある譯でなく各自が勝手に假の名を用ひるので、夫れも是非とも用ひなければならぬといふ規定がある譯ぢやなし、であるから余は姓迄も改めて居るのだと言へば夫れまでだが、男子が筆を取つて天下に見へるのならば須らく堂々とやるべしだ。それが慣習とか或はさうするに至る歴史とか故事とかがあるといふならば



名前だけ雅號を用ひて、姓は本姓にして置けばよいではないか、何うだらう此事は？

吉村忠雄又は次郎生と稱する「堂々たる男子」で、しかも匿名を用ひてゐる人は、「先生」が新聞に出てゐる中に此の一文を寄せて掲載を中止させようと思つた程だと云つてゐる。さうして他人の雅號を用ゐる事を云云しながら、

余は今此書を匿名でもつて君に呈上するが、之は暫時許して呉れ玉へ、其中には屹度判る時が来るから、君も此書を手にしたからには何人が寄越したか屹度疑念を抱くことだらう、何人であるか當てて見るのも一面面白いことだらうと思ふ。

といい氣なよたを飛ばした擧句に、

以上の間に對して日々紙上なり三田文學なりへ御答をして下さつたらば、余

の頗る幸甚とするところである。(二月十八日夜)

と最後を結んだ。

吉村忠雄又は次郎生は、自己の匿名を辯護して、「何人であるか當てて見るのも面白いだらう」と云つてゐるが、自分には自分の「近親者」の中にこんな馬鹿々々しい人間を發見する事は出来ない。この「堂々たる男子」は深川區猿江町と封筒には書いて居るけれど、郵便局の消印は三田局で、大正七年二月十九日午前十時と十一時の間に受付けたものである。自分には深川猿江町に住む親類も友人も無いから、これも亦「堂々たる男子」の卑怯なる詐術に過ぎないのであらう。

何れにしても自分には誰人の手に成つた一文であるか見當がつかない。文中見るところの目障りな田舎訛、例之「なけらねばならぬ」「好きからに筆を執つて」などと云ふのを見ると、頭腦ばかりでなく起居動作も粗野な人間なのだらうと思



ふけれど、そんな粗野な人間を「近親者」の中に見出す事は出来ない。或は吉村忠雄氏又は次郎生は住所を詐り、姓名をかくすのと同じ筆法で「近親者」などと嘘をついてゐるのかとさへ疑はれる位、誰人の所業か推測さへも不可能である。兎に角自分は自分の近親者の中に、かういふ没分曉漢の居ない事を希望する。

吉村忠雄氏又は次郎生は「あの子供が」と輕蔑した語調で繰返してゐるが、子供は常に大人よりも伶俐である。自分は自分よりも年長の者よりも年少の者に對する時の方が怖ろしい。若き時代は常に一種の脅迫的、壓倒力を以て自分の後に追つて来る。子供を馬鹿にする者は自分の毫碌に氣の附かない人間に違ひない。

詰問者は明かに「先生」に對して義憤を發してゐる。不幸にして自分は彼の一篇に對して自らその出來榮の勝れてゐないのを耻ぢてゐる。従つて彼の作品が「物になつちや居ない」と云はれても爲方が無いと覺悟してゐるが、しかし吉村忠雄

氏又は次郎生の言ふやうな見當違ひの攻撃に對しては、甘んじて首肯する事は出來無い。

第一に吉村忠雄氏又は次郎生は、文藝の價値は「一般讀者の感興を惹くことの多少と勸善懲惡的な誘導力の多少とに由りて決する」ものだ云つてゐる。尤もその前に、それは「新聞紙の如き上下卑賤あらゆる階級」を通じて讀まれるものに公表する場合と斷り、更に上下卑賤とは文藝を解すると否とを標準として決する區別だと説明してゐるが、全體の論旨から推測して、此の制限は餘り重要な意味は無く、難者は勸善懲惡の規矩によつて藝術の作品の價値を定めようとしてゐるものと見做しても差支へないらしい。貴重なる紙面を費して、今更教訓的な藝術の作品は價値の高いものでない事を茲に説明する勞は避ける事にするが、吉村忠雄氏又は次郎生の論理から云へば、浪花節は他のあらゆる音曲よりも價値



のあるもの、曾我之舎の仁輪加は歌舞伎劇よりも尊いと云はなければならぬ。更に他の方面に例をれば、愚夫愚婦の大衆に信奉される天理教のお姿さんは並ぶものなき偉人であらう。熟考考へる迄も無く吉村忠雄氏又は次郎生の如きは「下卑賤の階級」の最も卑賤なる部類に属する人に違ひない。

曾て乃木大將が腹を切つて死んだ頃、渡邊霞亭といふ小説家はその逸事を集めて小説體で書いた事があつた。勿論「一般讀者の感興を惹くこと」を専一としたもので、忠君愛國の結晶、勤儉尚武の模範として、主人公なる將軍を神の座に押直さうと努めたものであつた。その一節に、將軍の質素を物語るところがあつた。兵營から時たま歸つて來る夫を慰める爲めに、夫人は夫の好物の豆腐はもとより、心づくしの料理を膳にのぼせてすすめたが、將軍は數々の料理の並んだのを見て反つて不機嫌になり、豆腐以外は一切箸をつけなかつた。食事が済むと夫人に

向つて、久々の我家でうまい食事をした喜びを述べた後で、「若し豆腐だけで、他のおかづがなかつたらもつとうまかつたらう」と將軍は云つたといふのである。此の話を讀んだ時に、自分は將軍の芝居氣の多かつた事には反感を持つて居たけれど、兎に角珍しい悲劇的性格の人として崇敬もしてゐたのが、意外に安つばいけちな人間に思はれて來て不愉快だつた。教訓的作品といふものは、屢々かういふ弊害に傾き易い事を知つて貰ひ度い。學校で教へる二宮金次郎や近江聖人を道具に使ふ修身よりも、狐や烏が物を云ふお伽噺が如何に深く子供の純美なる心に觸れるか。無理押しつけに押しつけて飲み込ませようとする修身が、殆んど教育的効果を持つてゐない事は、實際教育の任に當る人の常に嘆じてゐるところである。

「先生」が「物になつちや居ない」といふ批評は自分の甘受するところである。け



れども吉村忠雄氏又は次郎生は、彼の作品が如何いふ性質のものであるかを全然了解してゐない。如何に「文藝を解せざる卑賤の階級」の一人にしても、あまりに自負し過ぎた賤民である。作品の傾向を了解しないのは爲方が無いとしても、賤民の癖に斯くあれと指導してゐるその指導が、全く作者としての自分の常に避け度いと思ふところを目標としてゐるのだから、その標準から「物になつちや居ない」と罵られるのは寧ろ名譽だといつてもいい。

吉村忠雄氏又は次郎生は「迅き事風の如きもの後には動かざること巖の如きものを、静なること林の如きもの後には波瀾幾千丈といった風のを配するとか、坦々でなく紆餘曲折端睨すべからざる中に偉人の俤を偲ぶといふ風にするのが真に是れ偉人を偉人として遇し、讀者の興趣を彌が上にも湧き立たせ且は後世の人々をして其俤を偲ばしむる眞の方法」だと説いてゐるが、その單純淺薄

な英雄化、戯曲化を避けるのが、眞に偉人を偉人として偲ばせるものだと思ふは考へる。古來我國の歴史も戯曲も物語も、その中に現れる人物を、極端なる英雄豪傑聖人善人と、極端なる弱蟲卑怯者佞人悪人の二派に分ける慣習があるので、その折角の偉人豪傑、又は反對の悪人極道も、人形芝居の人形よりも更に遙かに人間らしさを缺いたものになり下つてしまふ。吉村忠雄氏又は次郎生が要求する處も、即ち此の人間らしからぬ人間として「先生」を描けといふに外ならない。自分は「先生」が上野の山の砲聲を聞きながら西洋の經濟書を講義したといふ逸事や、伯爵に敘すると云ふのを拒んだといふ話などよりも、あれ程一から十迄警世の事に一身を任ねた人も家庭に於ては極端に子供を甘やかしたといふ話を聞いた時に、かへつて「先生」の人となり懐しく思つた。自分は「先生」を曲解して、人形や土偶にはし度くない、「先生」を偉大なりと思ふ丈「先生」を人間扱



ひし度いのである。

お氣の毒ながら吉村忠雄氏又は次郎生は、單に文藝を解せざる「卑賤民」であるばかりでなく、全然文字を解さないのではないかとさへ疑はれる。それは「足下は言はん先生は、然る波瀾に富んだ性行の人ではなく世に平凡なる偉人と言はれし通り頗る常識の發達せる平凡なる人であつた」といふ聞き捨てならぬ一節である。自分の「先生」の何處に「先生」を平凡人だと書いてあるか。自分は吉村忠雄氏又は次郎生の考へる如く、常識の發達した人は即ち平凡人だなどいふ亂暴な考へは持つて居ない。又偉大なる人は必ず奇行に富むものだなどいふ間違つた考へも持つて居ない。「當時の人にしては奇想天外より落つるといふ様なことばかりされた人である」とさもほこりに詰問者は書立ててゐるが「先生」の偉らかつたのは、最も吾々の生活を時勢の進歩に伴はせつつ合理的に導いた事にあ

るのであつて、滿洲浪人や衆議院々外團のやうな奇行を賣物にする徒輩と同列に見られては堪らない。乃木將軍は腹を切つたから偉いのではない。腹なんか切らず、夫人の命迄も奪はなかつたらもつと偉らかつたかと思はれる。西郷隆盛は犬を引張つて立つて居るから偉いのではない。我が「先生」は腹ごなしに米をついたから偉いのではないのである。

これで「先生」に對する答辯は濟んだから、ついでに斷つて置くが「先生」は新作ではなくて大正一年か二年頃に、小説らしからぬ小説を書き度いといふ慾求の起り始めた時代のものである。特に末尾にその稿の日附を記して置いたのだが、古い原稿を掲げる事は新聞社の喜ばぬところだつたと見えて、作者には無斷で削つてしまつた。

次に質問されたのは「好きからに文筆を弄んでゐるのか或は本職的に没頭し



てゐるのか」といふ頭腦の古い連中のおきまり文句である。換言すれば道樂か本氣かといふのであらうが、自分の創作慾は軍人と稱される人間が武士道を弄び、政治家と稱される人間が憲政を弄ぶのとは、些か趣を異にして居る。自分は文筆で衣食はしてゐないが、それが本氣でない證據にはならない。銀行員が銀行の爲事ばかりしてゐたからといつて、必ずしもその人が本氣だとは限らない。要はその意志にあるので、外觀の差別は問題の外である。自分が勸善懲惡を專一にしたり、「卑賤階級」を顧客として創作をするのなら、それは本氣でないといふは、それでも爲方が無い。吉村忠雄氏又は次郎生の如き、お粗末な程簡單な人間には、手取早い職業別によつて、人を見る以上に人間性を見る丈の能力は無いに違ひない。

更に粗雑なる頭腦の持主は、自分が數年間海外に留學したのは小説「汽車の旅」

を書く爲ではなく、「必ずや其修め得た處のものを以て大に活動せんが爲めであつたらう」と難じてゐるが、自分は「汽車の旅」を書く爲めに洋行したのだと答へても構はない。少くともあの一篇は自分が外國から歸つてから書いたものであるから、自分が何かしら海外で學んだものがあれば、それはあの中に含まれてゐる筈である。正直のところ自分は「先生」には自信が無いが、「汽車の旅」の方は少自分の作品としてはいいものだと思つてゐる。學校で無理に教へる學問などよりも遙に尊いものが、あの小篇の中に潜んでゐる事を思ふと、自分は海外留學の徒事でなかつた事を満足に思ふのである。

吉村忠雄氏又は次郎生は、さも知つたふりをして「君が専門に修めたものでも確乎りとやつたがいゝ」などと云つてゐるが、自分は此の人々が考へてゐるやうな意味で専門などは何もない。自分は一科の學問をする爲めに外國へ行つたので



は無い。自分は自分を最もいい人間にする爲めの教養を深めようとは思つてゐたが、本来自分の性質から云つても、雑語の學問などは修め度くなかつた。「近親者」と名告りながら、その位の事も知らないのは、愈々「近親者」でない證據かと思ふと、自分にとつては限り無き喜びである。

吉村忠雄氏又は次郎生は「卑賤階級」の人間に特有な「今や國事は日に多端で三文文士の御託を聞くよりも一人でも多くの實際家を必要としてゐる」と、よく實業家と稱される人間の中の、金力と頭腦の力の不平均なものが、耻し氣も無く繰送す言葉を口にして自分の教養の無い事を正直に曝け出した。目前の好景氣に浮調子となつた成金は、如何に頭腦の無い「實際家」の集團によつて國民が衰頹するかを知らないのである。今「國事日に多端」なる時に最も必要なのは、ハンマアばかり握つてゐて頭腦の空虚な人間が不必要だと思つて居る人間そのも

のである。原始時代の人間は食物で生きて居たかもしれないが、文明の世の中に於ては人は思想なくしては生甲斐が無いのである。

匿名好きの吉村忠雄氏又は次郎生は、水上瀧太郎の匿名を何故か感ただかに詰問してゐる。見聞の狭い「卑賤民」は雅號は單に下の名前を變へるものだと考へてゐるが、東西古今を問はず、幾多の文人墨客の中には全姓名に變名を換へ用ゐた例がいくらもある。ピエル・ロライ、ジョージ・サンドなどといふのも筆技名である。江戸時代の戯作者の殆んどすべてが本名を用ゐてゐない事は、勸善懲惡主義の匿名好きの吉村忠雄氏又は次郎生も先刻承知の事であらう。近くは春之舎おぼろ、嵯峨之舎おひろ、二葉亭四迷の如き、更に新しいところで太田正雄氏の如きは木下杢太郎、さしのおかしや、地下一尺生、その他めまぐるしい程の變名を用ゐてゐる。自分が自分の崇敬する明治大正の一大藝術家泉鏡花先生の作



中の人物の姓名を無断借用して水上瀧太郎と稱へたのは、別段深い意味はない。子供の時分から物を書く時には、親のつけた名前よりも自分自身で考へた名がつけ度かつたので、さうした迄の事である。しきりに「近親者」だ「近親者」だとしつつこく云ひながら、ちつとも本當の自分を知らないところを見ると、吉村忠雄氏又は次郎生は人違ひをしてゐるのではないかと疑はれる。断つて置くが自分の本名は阿部章蔵である。

吉村忠雄氏又は次郎生の愚にもつない質問に長々と答へながら、自分は自分の正直過るのが馬鹿々々しくなつたが、考へて見ると吉村忠雄氏又は次郎生の如き「卑賤民」は數に於て恐るべき勢力を持つてゐるのであるから、自分が本氣で努力してゐる藝術の爲めにも、勢をいとはす近答しなければならぬやうにも思はれる。讀者恐らくは、馬鹿々々しい詰問に取合つてゐる自分の愚を救ひ難しとする。

るでわらうが、その自分の馬鹿正直をさして即ち「愚者の鼻息」と題したのである。(大正七年六月十八日)



「その春の頃」の序



自分の第二小説集「その春の頃」は、大正元年の秋自分が渡米した後で、第一集「處女作」に續いて突然出版の運びになつた。第二集の爲めにと想つて書いた序文は間に合はなかつたので、その儘机の抽出にしまはれてしまつた。此頃、夥しい書きかけの原稿の整理をしてゐると、その序文が皺くちゃになつて出て來た。讀みかへして見ると或時代の自分の心持が蘇生して來て、裂いて捨てるのは残り惜しく思はれるので、清書して世に出す事にした。もとより今の自分から考へると、削り度い箇所も多いのであるが、全體に漲る若々しい詠嘆的ところがわれながら懐しいので、わざと一字の増減もしない事にきめてしまつた（大正七年六月十八日）



わが父母人にすぐれて行ひ正しくおはせば、我が家は世に勝れて良き家なる事をわれ曾て些かも疑ひし事なし。

わが家は富み、わが父母限り無くわれをいつくしみ給へば、われ未だ曾て食ふべき物、住むべき家、着るべき衣服の乏しさを思ひし事なし。

されど何故か予は物心覚えし日より、わが我儘なる心に常に何をか求め憧れつつ遺瀨なき念ひ束の間も忘ることなく、曉は曉の、夕暮は夕暮の悲しさに堪へず、此の念ひ消えぬ苦しさに悩みては、遂に安價なる冷笑と卑怯なる皮肉のかけに、ふてくされたる安住を見出さんとするに至りしが、しかも我が心はなほ其處に安らかに眠る事能はざりき。

わが心、何を求め何に憧るるや、われ自らもわき難きを、われ自らにあらぬ人の父母なりとていかで知り得ん。我が父母はただ只管に限り無くわれを愛でいつ

くしみ給ひき。

われ常にこれを想ふ毎に、父母の慈愛の深ければ深き程、解き難き心の苦しさに頭痛みて堪へ難き心地す。

われは我が父を父とし母を母として生れし事を何人に對しても憚る事なく誇らんとす。

我が父はわれ等はらからに對して曾て一度も怒り罵りし事なく、すべてをわれ等が思ひのままに任されたれば、われ等父をおそるる心を知らで過ぎにき。これわが殊にありがたく思へるところなり。

わがはらからは皆賢く皆おとなしかりしにわれ一人父母の良き教にそむく事多かりしが、しかも我が父はわが罪を一度も責め給ひし事なし。われはわが無邪氣



にしていたづらなりし少年の日に、疝のたかぶりては父母にさへ屢々拳を振り上げて立ちむかひし事を、深き悔恨と共に忘るる事能はず、さる折にもわが父は静かに我が亂暴を看守りて居給ひしのみ、彼の世の中の父親がその子の悪行を矯めんとてうち打擲するが如き事は、予の曾て我が家に見たる事なきところなり。我が母の誰人に對しても優しくおもひやり深き事は、我が母を知る人の誰しもいなまぬところなる事をわれ亦信じて疑はず。

おもひやり深き母は自の事と他人の事とのわかちなく、世の事人の身の上の事に就きて、共に喜び共に憂ひ共になげき共に悲しみ給ひき。われは我が母の涙を見たる事あれども怒れる聲を聞きし事無し。

幼き日我が最も嬉しかりしは、今は世になき母方の祖母なる人、又は我が母人

よりさまさまの昔話、物語のたぐひつぎつぎにせがみては、飽く事なく聞く時の心なりき。桃太郎かちかち山は誰も皆知れる話なれば誰人より聴き覚えしかを知らざれども、松山鏡落窪物語鉢かつぎ姫などは、我が祖母我が母の懐に眠りつつ幾度となく語られしものなれば、そのかみの若かりし母の聲さへまざまざと耳に残りて、其の折物語の悲しさに涙流せし心地の今もわびしく思ひ出でられては返らぬ日のいとせめて戀ひしきものはかなし。

その祖母なる人はものの記憶よかりし人にて「八犬傳」など芳柳閣の邊迄暗誦んじ居て、求むれば何時も高らかに誦して聞かせ給ひぬ。「平家物語」の幾章も亦かくしてわれは聞き覚えしなり。

父は若きより讀書を好み詩をよくしたりと聞けど、和歌の上手なりしその祖母及び今も變らず月雪花の折にふれては詠み出づる母を見真似て、われは假名文字



の書多く好みて讀みしが、初めて三十一字の歌づくりならひしも十二三の頃にかありけん。いかなる歌を詠み出でしか今記憶に残るものなきは恨みなり。

「少年世界」は恰も我が小學へ通ひ初めし頃世に出でたれば、我が頭にいちはやく彫られしは小波山人の懐しき名にほかならず。その頃の人の心はいかばかり長閑けかりけん、いかにして家庭を圓滿にすべきか、如何にして貯金をなすべきかを究むる事など未だ世の人の心に多く觸れざりしなるべし。家内の者集へる茶話の折など玄齋居士が「小説家」の筆廬舎なまりと蓮牡丹菊にたとへられし三美人が明日の心にかかれるまま人々の口にのぼりて、なかには眉ひそめて物語の中の人の上を氣づかへるもありしなり。ちぬの浦浪六涙香小史が小説翻譯のたぐひも、屢々人々の手より手に渡りて讀まれたりし事を忘れず。

やがて少年の日の若き心の喜びに、古き新しきのわかち無くさまさまの書讀み初めしより、何れは勝れたる人々の作の嬉しかりしが多かりし中にも、今は世になき人にては尾崎紅葉先生、齋藤綠雨先生、樋口一葉女史、稍々遅れては國木田獨歩先生の御作など残りなく求め讀みしが、思ふにわれはただにその人々の作品の嬉しかりしのみならず、その人となりの更に一層なつかしかりしを否む事能はざるべし。殊に尾崎紅葉先生は二人となき勝れたる人格の所有者なりしならんと想ふだに心震ふばかりなり。

今もなほしきりに筆執る人々につきでは何となく憚からる心強ければ、ただひそかに崇敬と感謝の念を捧ぐるに止めんと思へど、たゞ泉鏡花先生の御作に對する憧憬の、殆んど我が半生を切放して考ふる事能はざる程に思はるるまま、黙してあらん事堪へ難き心地すれば些かは茲に記して自ら慰まんと思ふなり。



泉鏡花先生は我が死ぬ日迄恐らくは變る事なく予に取りて懐しくありがたき御方ならん。初めて先生の御作の我が心に泌みて消えぬ思ひ出となりしは、其の頃「文藝俱樂部」に連載せられし「誓之巻」なりき。その巻を開く手も打震へつつ涙流して幾度は繰流しけん。遂には彼處此處暗んじたりしが、其後先生の御作にして我が目に觸れしもの一として讀み落したるものもなく、古きをもあさり求めしかば、我が友の一人はたはむれに我が先生の御作納め居る本箱を指して「鏡花文庫」と呼びたり。

いづれ劣りはなきが中にも「照葉狂言」は予の最も好みたるものにして、又今も變らず好めるものなる事ついでなれば記しつ。われ世の中の如何に尊き人賢き人にも逢ひ見度き願ひなけれど、先生にはかりは一度御目にかかり、先生の御作

によりてこの年月いかにばかり心なぐさみしかを聞えあぐる機會のあらば嬉しからんと十年に過ぎて思ひて變らず未だ中學に通ひし頃なりしが「泉鏡花先生の御作に就きて」なる一文を草せんとして筆執りし事ありしも、遂に我がよくなし得ざる事なるを思ひて止みぬ。その後屢々同じ願ひの手を驅りし事あれども、われどが不才を知らば幾度も執りし筆を皆折りて捨てしのみ。

我が處女作は開治四十四年三月相州湯ヶ原の山懐の流に近き宿の古く汚れたる机の上に成りぬ。その後數ふれば早く既に十數編の小説戯曲を發表したるが、何れも筆執りてありし間の心に似ず印刷成りてこれを手にする時、餘りの拙なさにさげなくなるをおきまるとしたり。

さればそれらの作品を一冊にまとめて世に出す時些かふてくされたる氣持なき



を得ずして、心の底に湧き起る不満と先望をやけと冷笑を以てなぐさめんと努むるに忙しかりき。かかる事云ふを人のとがむるあらば、われ又更に冷笑を以て自をなぐさめん。

わが最も心苦しきは文藝の作品と新聞の三面記事との相違を知らざる人にわが作の讀まるる事なり。曾て或る愚なる新聞記者はわが作品の二三をつなぎ合せて我が半生の詐りなき告白なりと思ひ、それによりて出たらめなる一文を草し麗々しくも三日に亘りて之を紙上に連載したり。

かかる事何故に心苦しきや敢て言ふの要なき事なれど、茲にわが作品に就きて少しく自註を加へんと欲す。

生れしは麻布の高臺なりしが、幼くして我が家芝にうつりたれば、其邊に住み

し人など多く我が記憶に残るものなきはもとよりなれど、或日或時わが日に映じたる街の様の不思議にも明かに思ひ浮べ得るまま、處女作「山の手の子」の舞臺を其處にとりたるなり。唐物屋の頭禿げし亭主の顔今も忘れず、繪草紙賣る店に屢々通ひしも事實なれど、その他の人はお鶴はもとより煙草屋の姉弟も皆我がはしいままに描き出せる假空の人物に過ぎざるなり。

『ぼたん』の中の人々は今も世にある人にして、彼の一編のみはまさしく我が幼き日及び我が見たる人の身の上を筆に上せたるものなるが、我が性質として後に至りよしなき事したりと思ふ心強く予を責むるものありき。此の一事を以て予は彼の作品を嫌ふ。

『うすごほり』に就きても亦些かはかかる念ひあれど、お澄さんは彼の小説に書きし如き身の上の人にあらざりし事を記さん。



「その春の頃」は我が作中就中拙きものなるが、彼の作は我が親しき友の身の上  
にありし事をその友の口より聞きし時話に酔ひて直に筆執りしものなれども、も  
とより描きたる話の筋道はわが脚色に過ぎず。初めその友の若くして頗る無邪  
氣なる道徳家なりし事にわが同情は催されしが、稿成りし時予に残りしものはな  
すべからざる事を爲したる事を悔る念のみなりき。

予は自も餘りに我儘にして人づき悪き事を知れど、不思議にもわが我儘を許  
して長く變らぬ僅少の親しき友を有せる事を思ふ毎に限り無く嬉しき心地して胸  
の躍るを覺ゆ。「ものの哀れ」の松波冬樹はわが中學時代の無二の親友なりき。彼  
は彼の作中に描きし如く壹岐の島に生れたる少年にして、頗る氣性烈しく狷介の  
性は他の多くの少年の寧ろ憎むところなりしが、予にとりては又なく親しき友な  
りしかば、恰も物の哀れを知る頃のわれ等は共に好める詩歌を誦するにも感極ま

りて屢々泣きぬ。

その後彼は二度目の落第に氣を腐らし朝鮮京城に在りし姉なる人を頼りて行き  
しが、韓の風は寒かりけん、間も無く肺を病みて吐血し、日本に送り還されて暫  
時諸處の病院に在りし後明治三十九年十二月二十一日彼の最も嫌ひなりし大阪の  
地に死にぬ。

「賢さん」の一編は亡き友田中憲氏と予との交友をありのままに記せり。予は何  
故か此の一編を小説と呼ぶる事を忌々しく思ふ心止め難し。恐らくは小説なる  
二文字が嬉しからぬ連想を予に與ふればならん。

われ等この人と親しかりし者は皆憲ちやんと呼び馴れたり。憲ちやんは色白く  
唇紅き美少年にして、予は曾てこの友の如く無邪氣に尊き子供心を長く失はざ  
りし人を見たる事なく世にもめでたき人に思ひしが、明治四十五年の春慶應義塾



理財科を卒業するに先だちて俄に病みてみまかりぬ。生前好んで尺八を弄びたるが、憲ちやん死去の事を聞きしその夜、我が家の裏手の竹籥をへだて、折柄寒き月明りに震へつつ、絶えせず消えずいとかすかに思ひも掛けぬ尺八の音の流るるを聞きて、われは我が心を失はんとしたり。

「途すがら」は五六年前九州に在る姉の許に赴きし時、人に誘はれて炭坑を見に行きし日の日記をもととして作りし純然たる小説なり。折しもその炭坑に火災ありて坑夫あまた地底に焼死したりし惨害の後なりしかば、臆病なる予の心は異常の恐怖に襲はれたりしは事實なれども、何ぞ予に尋ね行くべき美知代のあらんや、すべてはわが作りし物語りのみ。その父の命によりて庭前に愛誦の書一切を焼き捨てたる少年俊雄をわれ自なりと思ひし人ありしが誤れる事甚だし。さきにも云へる如くすべてに寛容なる我が父はわが文學を好む事にも何の干渉を加ふる事

なく、我が筆執りて無益にも拙き小説書く事を知れど未だ曾て予をとがめし事無し、なんぞ予をして我が愛誦の書を焼かしむるが如き愚かしき事をし給はんや。「ものの哀れ」の父と子の関係も亦わが空想の構へしものなる事を爲念附記す。「心づくし」には多くの事實と多くの空想とをまじへたり。これを明かに云へば前半に描きし事は大方據り處あれど後半殊に結末の數十行は單に都台よき結末を求めて我が綴りしものに過ぎず、予には彼の作中に見るが如き叔父も無く又曾て父母を憚りて我が筆を折らんとしたる事も無し。

「沈丁花」は三人の娘をかりて最も變化なき筈なる山の手の家の、なほかつ時勢の推移に連れて移り行く有様を主として描かんとしたるが、力足らずして意にたがへるものとなり終れり。彼の作こそは悉くわが空想の産みし所にして、描きたる人々の性格餘りに變化無しとの評ありし時われ自も亦頷きたり。



「噂」及び「夢がたり評議員會」はまことに噂と夢がたりに過ぎず、敢て説明を要せざるべし。

「友だち」及び「世の中」は近く予の試みし作なるが、何れは又後に至りて自堪へ難き迄厭はしくなるものなるべし。

「嵐」は一昨々年の夏鎌倉に在りし時、一夜俄に風荒れてすさまじく浪の高まりしが、海近き我が友の家如きは深夜枕に浪をかぶりし程なりしかば、常より寢つき悪しき子の雨戸を揺る風の音、遠く砂濱を打つ濤聲の騒がしさに、曉風の静まる迄一睡もなし能はざりし其の夜わが腦裡に成りし一幕物なり。別段我が家の海嘯に襲はれし事あるにもあらず、その折家に在りしは予一人なれば登場の人物皆わが構へしところにして所謂もでるを有せざるなり。

「いたづら」に就きてはそのかみの事の思ひ出でられて懐しき心地す。わが幼か

りし頃は未だ人々耶穌教に對して故もなき偏見を抱きてありし時代なれば、予等幼き者はなほ不可思議なる邪宗なりと自ら思ひ居りしも無理ならず、その會堂に石つぶてする事は勇しき嬉しきいたづらなりき。

或時近き家の子等と我が家近き蛇坂の上にて普連士女學校の寄宿舎の窓に予も誘はれてつぶてしに行きしが、我が家の隣なる寺の子の逃げ遅れて女教師らしき人に捕へられしを殘し、あわてふためきて走り歸りし予等皆其の子の身の上の氣づかはれて、或は生血を吸はるるにはあらずやと思ひ、或は十字架にかけらるるにはあらざるかとさへ疑はれて、誰一人聲高に物言ふ者も無く何れも息をこらして安否を氣づかひしが、夕暮方その子のつつがなくかへされて來りし時、子等皆怖ろしき危難を逃れたる心地してちひさき胸を撫で下したり。

今は懐かしき日の事にて彼の一篇はそれより想ひ浮びしものなり。



予にとりて文學はただ慰さみなり。曾て文學は男子一生の事業となすに足るや否やといふ題を掲げて諸家の説を求めし雑誌ありしが、予は事業なる文字の故も無く厭はしき心地して、かかる間に眞顔にて答ふる人の心持わが思ひも及ばざる勇しきものなる事を知りて寂しかりき。

われ常に思へり、われにして若し世の多くの人の如く勳章を得てなぐさまば、われにしてその人々の如く文學事業に一身を捧ぐる事を得ばいかばかり幸ならんと。

文學は遂にわが頼り無きなぐさみなり。(大正二年春)

購書美談



吾々の時代の多過る程多數の作家の中で、古典として尊重せらるべき作品を後世に残す人が幾人あるかを想ふ度に、自分は自分自身をも含ませてなさげ無い心持になるのを禁じる事が出来無い。

十數年前、文藝上の新しい主義が海外から移入された頃、その主義宣傳の運動に携はつた者は、政黨派の争のやうに黨同異伐を事としたが、年月がたつて、彌次馬に特有の興奮状態から覺醒した時、初めて彼等は自分達の値うちを意識し、或は意識させられた。或者は生れ故郷の土臭い田舎に歸り、或者は偉大なる都市の包容力を幸にして何處かに影を潜めてしまつた。近く更に新しい主義を提唱した一派は、投書家相手の雑誌に擔がれて、精神に異狀を呈した者の屢々經驗す



る喜悅の極、足は地上を離れて天へも昇るやうな有頂天の心狀に陥り、自分達丈は疑も無く生れながら恵まれた者であり、止る處を知らぬ力の進展を自己の内認めるものだと世の中を憚らす公言したが、遠き將來はいざしらず、少なくとも今日に於ては嘲笑の中に葬むられんとする状態である。

さういふ中にあつて、その主義傾向の如何を問はず、ほんとに僅少の作家ばかりが永久性を持つて居るのであるが、些かの疑も無く第一に指を屈すべきは泉鏡花先生である。

救ふ可らざる没分曉漢は別として、多少なりとも文藝の作品に親しみを持つ人は、その主義や趣味の相違から嫌らす思ふ點はあるに違ひ無いが、何れにしても泉先生の作品が古典として残ることを疑ふ者はあるまいと思ふ。かう云ふ自分身さへ先生の作品に嫌らぬ節が無いとは云へない。例之世間の誰も彼も口を揃へ

て讚美し、全體としての作品には感心しない人さへこればかりは激賞する絢爛を極めた先生の文章の如き、自分は稀なる名文だと思ふと同時に、時にふと天下の悪文では無いだらうかと疑ふ事がある。先生の作品の愛讀者の多くが随喜する所謂江戸趣味も自分は眉をひそめ度い。

それならば泉先生の藝術の偉大さは何處にあるかといへば、それはもつと本質的なもので、即ち作者の経験する感情——泉先生の場合には主として憧憬と反抗に根ざす——を讀者に移入し、作者の形造る感情世界に全然引入れてしまふ驚くべき魅力にある。勿論先生の作品に特有の構造、形式、色彩、音色の調整が此の使命を果す爲めに與かつて力ある事は疑ひも無いが、先生の作品が他に類例を見ない程讀者の心に影響する力を持つてゐるのは、主として先生の持つて居られる至純の感情の爲めである。



先生の作品が永久性を帯びてゐるのは、單に一時代の思潮流行と隔絶して居るからだ。消極的に論じるのは誤りで、それはその作品の内に含まれて居る至純の感情が、永遠に人の心の底に潜んで居る事實に歸す可きである。何れにしても先生の作品の稀有なる魅力は、内面的にも外面的にも、讀者に與へる感化力は偉大である。自分は倦怠と憂鬱に世の中も人間も厭はしくばかり思はれた頃、先生の作品によつて眠つてゐる感情を喚醒まされ、生甲斐のある世界を見出した一人である。同時に自分は、作品に現れてゐる先生の悪い趣味——例之月並な悪ふざけ、安價な芝居がかり、感服出来兼ねる江戸がり——などの感化を受ける人間がさぞ多い事だらうと心配になる。般鑑遠からず所謂鏡花會の人々の中などには鼻持ちもならぬ氣障な代物が多いさうである。

泉先生の作品の愛讀者には先生の作品の全部を集めて所藏しなければ承知しな

い人の多いのも、先生の作品の魅力の異常なる事を示すものである。或人々にとつては、その作品に對する欽慕は屢々戀に等しい。自分の如きも其の一人である。「外科室」「夜行調査」の昔から最近に到る迄の夥しい小説戯曲小品隨筆を、單行本雜誌新聞等に初めて現れた形式でひとつも残らず取揃へる事は殆んど不可能に思はれる。明治二十四五年頃から心掛けて、今日に到つて到底駄目だと思つた。自分が泉先生の作品を愛讀し始めたのはそれよりもすつと前であるが、丁度中學の二年時分から學校へ通ふ往復に、三田通の書店福島屋の店頭に一日も缺かす新刊の出るのを待暮して通つた。けれども自分がまだお伽噺を讀んで居た時代に出た單行本又は雜誌に掲載されたものを手に入れるのは、非常なる根氣と時間とを要する爲事であつた。

『新小説』『文藝俱樂部』『新著月刊』『小天地』といふやうな一流の文藝雜誌に掲



載されたものは大凡手に入つたつもりでゐた。ところが、日露戦争時分の事だと思ふ。博文館から發行される『葉書文學』といふ雑誌に、岡田八千代夫人の談話筆記だつたと記憶するが、その愛讀書について述べてある中に、泉先生の作品殊に『笈摺草紙』が激稱してあつた。それを見て自分は初めて先生に『笈摺草紙』といふ作品のある事を知り、今日迄のやうな不秩序な古本探しでは、まだまだ見落しが澤山あるに違ひ無いと思つた。

其處で自分は上野の圖書館に通つて、あらゆる文藝雑誌を借覽して『泉鏡花先生著作目録』といふものを作つた。それを懐にして手近の三田通から始めて、本郷神田の古本屋を閑さへあれば漁り歩いた。夜は縁日の夜店のかんてらの油煙にひせながら、産の上の古雑誌を端から端迄順々に探し求めた。

冬の寒い夜の事であつた。神田の夜店を漁りに行つて、有妻閣の前あたりだつ

たと覺えてゐるが、産の上に積重ねてある雑誌の間に、手垢で汚れた『笈摺草紙』の出て居る『文藝俱樂部』を見出した。喜びに震へる手に取上げて、値段をきくと拾貳錢だといふ。當時『文藝俱樂部』の古本に對してそれは法外の値段だつた。けれども自分が久しく探し求めて居た『笈摺草紙』に對してはちつとも高いとも思はなかつた。

その上自分は金錢について細かく云々する事を卑しむやうな教育を我家で受けて居たので、どんな物でも値切るのを耻ぢる習癖を持つて居た。直ぐに言ひ値で買はうとした。

ところが丁度自分と同じやうに其處にしがんで、先刻から古雑誌を引繰返して居た一人の男があつた。商家の若僧らしかつたが、古本屋のおやちが自分にむかつて十二錢だと答へた時、



「十二錢？馬鹿にしてやがら、こんな古雑誌。」

と横合から如何にも人を馬鹿にするなといふ語氣で云つて、目深くかぶつた烏打帽子の下に暗い顔をふり向けて同意を求める目付をした。自分は思はず知らず財布にかけた手を放した。

勿論その若僧は彼自身も買手であるといふ共同の利益の爲に、自義憤を發したのであらう。けれども自分に取ては彼の一言は手痛く胸に響いた。「笈摺草紙」の十二錢は自分の主觀的價格からみればおい夫と支拂つて差支へないけれども、客觀的價格からみれば成程人を馬鹿にした者に違ひない。見榮坊の東京の人間の弱味が自分をして前後の分別も無くなさしてしまつた。人前で他人に馬鹿にされる事は何よりも我慢が出来ない。どうしても値切らなければ耻辱だと思つたのである。自分はそれを八錢に値切つたのか六錢に値切つたのか四錢に値切つたのか忘れ

てしまつたが、兎に角値切つたのである。いかにも古本は買馴れてゐるやうな顔付をしたのだつたらうと思ふ。

茶色の釜形の帽子の中にも鼻もかくれてゐて、色の褪めた毛糸の襟巻に頸を埋めながら身動きもしないで煙草を飲んでゐた古本屋のおやちは、煙管をはたくのも不性つたらしい奴であつたが、

「まかりません。」

と不機嫌な取付場の無い返事をして、又煙管をくはへた。

未練らしく押問答をした後で、おやちの傲岸な態度は一層自分の立場をやりきれなくしてしまつた。今更それを買ふ事は出来なくなつてしまつたが、此の一冊を手に入れないければ永久「笈摺草紙」に入らないやうに思はれた。それでも自分の見榮を張り度いけちな根性は、自分をしてさもそんなものは入るものかとい



ふやうな態度を執らせてしまった。

立上つて勢ひよく歩き出したが、どうしても思ひ切れなかつた。ふりかへつて見ると、おやぢは何處を風が吹くといつた風をして煙を吹いてゐるのであつた。

癪に障つて堪らないので、往來の石つころを蹴飛ばした勢ひで、一町ばかり次の町筋の角迄来たが、右に行かうか左に行かうかと考へた時、どうしてももう一度後に引返して耻を忍んでも「笈摺草紙」を買はなければならぬと思ふ心持が強く起つた。暫時躊躇した後で、自分は思ひ切つて後に引返した。

古本屋のおやぢは依然として身動きもしないで煙草をふかして居たが、たつた五分か十分とはたたない間に「笈摺草紙」はもう買つてしまつた。

自分は涙の出る程なさない心持で、古本屋のおやぢと先刻の若僧を憎んだ。

なんだかしらないが、彼の若僧が故意にけちをつけて、自分の買はうとする心持

を碎き、その後でまんまとせしめてしまつたやうに思はれて爲方が無かつた。けれどもそれは恐らくは自分のひがみであらう。あんな奴がそれ程に「笈摺草紙」に焦れてゐるとは想像出来ないから。

未練らしく産の上の古雑誌を、もしやと思つて幾度も探してゐる自分を、古本屋のおやぢはさげすむやうに見た。

自分は其後泉先生及永井荷風先生の作品の出でゐる古雑誌は一切云ひ値で買ふ事にしたが、他日「笈摺草紙」を手に入れてから十年以上もたつてゐる今日に到つて、未だ彼の神田の夜店の古本屋のおやぢの姿を、憎惡の念を抱かずに思ひ出す事は出来ないのである。

或時或席で右の「笈摺草紙」を買ひそこなつた話をした。すると其處にゐた友人梶原可吉君は、その話に誘はれて、彼の購書苦心談を彼一流の高調子で始めた。



その中で泉先生の『日本橋』についての一節を、自分は此處に傳へようと思ふ。梶原君は常に若々しい心を失はない熱情家で、且社會改良に熱心な理想家である。當然の歸結としてその愛好する藝術は或種の傾向の著しいものに限られてゐる。泉鏡花先生の作品に現れてゐる道徳——ありふれた世間の血の氣の無い道徳ではなく、先生の熱情に育まれた道徳——は彼が隨喜し、先生の主張される義理人情の世界、戀愛至上主義は即ち彼が涙を流して渴仰するところである。大正三年の秋彼は滿州大連で、面白くも無い殖民地の人間に圍まれて、面白くも無い月給取の生活を送つてゐた。一日の勞務が終ると、寄食してゐる叔父の家に歸り、入浴して晚餐の卓にむかふのであるが、恰も殖民地に特有なもののやうに思はれる苛々した心狀を免れる事は出来なかつた。彼は夕暮を待つ蝙蝠のやうに、日が沈むと家を出て散歩するのが癖になつた。

夕暮の早い大連の町には初秋の霧のかかる頃であつた。大通のアカシヤの並樹の下を、彼は街燈の灯に照らされながら町の方へ歩くのがおさまらだつた。目的の無い散歩ではあつたが、毎日々々同じ道を歩くうちに彼が必ず立寄る處が出来た。それは或る町角の本屋である。元來好き嫌ひの色彩の鮮明な梶原君は、いつたん惚れたとなると、その惚れた相手方を最上級に祭り上げなければ承知しない人間である。さうして彼には學校時代からお馴染の三田通りの福島屋といふ惚れ込んだ本屋があつて、東京に居る時は勿論、神戸にゐても大連にゐても、遙々注文して其の店から送つて貰ふ事になつてゐたから、大連の町角の本屋では別段買物をするのではなかつた。ただ女の人が呉服屋の窓の前に立てば目の色が變るやうに、彼は本屋の前に立つて胸の躍るのを覺える種類の人間だつたのである。



或晩彼は其の町角の本屋の店に入つて新刊の本を一巡見て居た時、泉鏡花先生の新作「日本橋」を他のがらくた本の間に見出した。彼は迂濶にも「日本橋」の出版の豫告を知らなかつたので、菊版映人の美本を手に取り上げる迄は、それが眞實に泉先生の新作であるかどうかを疑つた。其晩直ぐに福島屋に注文状を出したのは勿論である。

今日は来るか明日は届くかと、毎日「日本橋」を待暮したが、一週間たつても十日たつても届かない。由來福島屋は上品なおかみさんと大様な若旦那の經營する氣持のいい店であるが、勘定を取りに来ないのと、記帳落の多いのと、注文の品をなかなか持つて来ないので聞えてゐる。「日本橋」の發送も勿論悪氣は無いが等閑にされてゐたのに違ひ無い。

その間に梶原君の町角の本屋に通ふ事は一日も止まなかつた。一刻も早く読み

度いと思ふ心がどうしても彼を落着かせなかつた。毎日毎日店頭に立ちながら、曾て買物をしない自分に向けられる小僧の視線を不愉快に思ひながら、幾度手に取上げて「日本橋」を開いて見たかわからない。

或夕方、又行くのは羞しいなと心の中では思ひながら本屋を訪れたか、その日迄は二冊並んでゐた「日本橋」がいつもの場所に一冊しか見えなかつた。失敗つた。誰かに買はれたなと、自分の秘藏の物を奪はれたやうな嫉妬を感じた。けれどもまだ一冊残つてゐるのを少しばかりの慰めにして、彼は又それを手に取つて見たが、心なしか小村雪岱氏の繊細な筆で描かれた綺麗な表紙も何時の間にか手擦れ垢じみて来たやうに思はれた。

「自分の手垢で汚したのかもしれないが、その時はなんだか他人も自分のやうに「日本橋」に思ひをかけてゐるやうに思はれて爲方がなかつた。」



と此話をした時に、梶原君は附加へて説明した。

彼は毎日徒らに手に取上げては又もとの書棚にかへす『日本橋』に不思議な愛着を感じて来た。あてにならない福島屋の送本を待つてゐる間に、残つた一冊も買つてしまつたらどんなに寂しいだらうと考へた。大連みたやうな下等極まるころにも我が泉先生の作品を讀む奴があるのだから油断は出来ない。どうしてもこれは自分が買つてしまはふと思つた。本は必ず福島屋ときめてはゐるのだが、そんな事は云つてゐられない位残りの一冊は彼の心を離れなくなつてゐた。さうだ買はふと決心した時、梶原君は懐中殆んど無一文だつたなさけない事實を思ひ出した。

『どうしてあれ程貧乏だつたのか、兎に角五十錢もなかつた。』

と羞かしがりの梶原君は、今でも顔を赤くして云ふのである。

幾度見直しても定價金一圓二十錢といふ奥附は變らなかつた。此時程無駄づかをひ悔いた事はなかつた。勿論乏しい月給ではあるが、貰つた其日に殆んどすべて飛んでしまつた事を思ふと残念で堪らなかつた。それからそれと自分の平生の生活から、大連なんかに来てゐる身の上迄考へながら、アカシヤの並木の下を彼は悄然として叔父の家に歸つた。

福島屋に宛ては早速催促状を出したが、町角の本屋へ通ふ事は矢張り止められなかつた。晝の間、會社の事務室の机にむかつて、誰かが『日本橋』の残りの一冊を自分から奪つて行く不安が胸中を往來した。どうせ遅くとも福島から送つて来るには違ひないと考へても、いつたん執心を掛けた町角の本屋の『日本橋』を、自分の讀まないうちに先に誰かに讀まれてしまふ事が面白くなかつた。

福島屋からの送本は何時來るだらう。一圓二十錢の金が欲しい、月給日が早く



来てくれればいいといふ事を繰返し繰返し考へながら、毎日彼は町角の本屋に通つた。その道筋の川にかかつてゐる橋の名の日本橋といふのさへ自分を嘲笑する爲めに名づけられたもののやうに思はれた。

本屋の店頭立つて、まだ残りの一冊が無事に書棚の上のからくた本の間に積まれてゐるのを見て一先づ安心して家に引返へすのも、二週間過ぎ三週間過ぎ、たうたう一月近くなつた或日、彼は漸く福島屋から送つて来た「日本橋」を受取つたが、それと同時に待焦れてゐた月給日も到来した。

幾枚かの札の入つてゐる一封を受取ると、梶原君は直ぐに町角の本屋に駆けつけて、此の幾日の間毎日毎日寂しい懐をなげきながら眺めてゐた「日本橋」を手に入れた。福島屋からの一冊は現に手に持つてゐるのだけけれど、あれ程迄に自分か思ひを寄せた一冊を、何處の誰だかわかりもしない他人の手に委ねる事は情

に於て忍びなかつたのださうである。

「その時の嬉しさつたらなかつた。」

と梶原君は目も鼻もなくなした嬉しさうな顔をして話を結んだ。

「笈摺草紙」を手に入れそなた自分の失敗談を冒頭にふつて、梶原君が「日本橋」を手に入れた一事を購書美談として世の人に傳へようと思ふ。(大正七年七月七日)



向  
不  
見  
の  
強  
味



たださへ夏は氣短になり勝なのに、全身麻酔をかけられて、外科手術をした後の不快愉な心持は、病院を出てから一週間にもなるのに、未だに執念深く残つて居る。

甚だ汚ならしい話だか、疾患は瘦持なので、病院へ通ふのに、乗物に腰掛けて揺られるのが苦痛で、何時も電車の釣革につかまつて立つて居るのであるから、芝の端から築地迄小一時間もかかる道中は、たとへ回復期にありとはいへ、衰弱した身體には随分堪へるのである。病院で患部を洗はれ、火照る程泌みる薬を忘々しく思ひながら、又同じ道を立つめの電車で家に歸ると、全く疲れ切つて何にする氣力もなくなつてしまふ。本を読む事も、新聞を読む事も大儀で、今でも



クロロホルムのさめ切らないやうな氣持で仰臥してゐるばかりで、苛立たしい心持を耻ぢながら、それを免れる事が出来ないものである。

ところへ兄が見舞に来てくれて、いろんな話の末に、歌舞伎座の『沈鐘』を見に行かうと思ふが身體に故障が起らなければ一緒に行かないかと誘つてくれた。自分も『沈鐘』は見度いと思つてゐたので喜んで同意したが、その實心の中ではこの芝居を兄には見せ度くないと思ふ心持が強かつた。

自分は世に所謂新しい芝居を好んで見度がる一人であるが、それを嚴格に批判的に見る事はあまりに残酷な氣がして堪へられない。殊に日本の俳優が泰西の名戲曲を演じる場合の如きは、その原作に對する尊敬と、出演者の努力を買ふ同情と、時には原作の偉大さと所演の貧弱さの餘りに極端な對比が惹起する憐愍から、やうやく一人立ちしてヨチヨチ歩く赤坊を見る親の心持で、いたはりいたはり見

てゐる態度を取るのである。恐らくこれは自分一人でなく、世の劇評家諸氏といへども、歌舞伎劇に對するやうに、容赦なくうまいまづいを論ふのでなく、割引に割引をして見るのに違ひない。近頃流行の感激したがる一派といへども、子供の習字を極上々とほめはやす手なのだらうと推察される。ところが吾々と違つて新しい戲曲の發達に特別の關係の無い人、換言すれば所謂文壇の人でない人には、下手な芝居は單純に下手な芝居で、遠慮會釋もなければ強ひておだてたりほめたりする心持も起らない。坪内士行東儀鐵笛上山草人松井須磨子よりも、市村羽左衛門、尾上菊五郎、河合武雄、喜多村綠郎の方が一見して比べものにならない程うまいと思はれるのは當然である。此點に於て、新しい戲曲の上演に同情を持つ自分は、すぐれて感覺の鋭い、藝術に對する理解力の深い、且つ新しい芝居をさへ割引しないで見るに違ひない兄に對して、自分の掌中の物をかばふ心地から、自



分自身も文藝の事に携はる事の、一種職業的恐怖ともいふべき不思議な感情を抱いたのである。

最近に外國から歸つて來た兄は、長い間海外に生活した者の誰もが感じるやうに、まだ以前の生れ故郷の生活にしつくりあてはまらない心持から、何かしら新しい刺激に興味を見出し度がつてゐるらしかつた。彼地に居る間に芝居を見て廻るのを爲事にして居た事實と、曾て本で讀んだ『沈鐘』の面白さを、そのまま舞臺の上に期待して居るらしい様子が、自分をして一層不安を抱せたのである。如何かしてうまく演つてくれればいい、新しい役者の新しい芝居も決して愚劣なものではないと思ひ知らせてくれればいいと、自分は他人事でない氣で心配した。

その日は朝のうちに病院に行つて、診察の済んだのが正午近かつた。病院の近

所で認めた食事の終つたのが一時で、それから家に歸つて又出直す時間は十分あるけれども、電車に乗つて立ちづめの不愉快を考へると歸宅する氣はなくなつた。しかし四時開場の時間迄をどうして暮さうかと暫時考へ悩んだ末、先頃入院してゐた間に度々見舞に來てくれた知人の家に行つて、お茶でも頂戴しながら遠慮なく横倒しにならして貰ふ事に決めた。

主人は留守だつたが、心置きない間柄なので、勧められるままに上つて、不由な身體を氣隨に横にさせて貰ひながら主婦と話し込んで居たが、後から他にお客が來たので、主婦はその日の新聞を自分の目の前に揃へてくれて、そのまま座敷の方に行つてしまつた。

『やまと』新聞に連載されてゐる泉鏡花先生の『芍薬の歌』に感服した後で、『時事新報』の文藝欄に本間久雄氏の『新秋文壇の收穫』 || 技巧派と無技巧派



の對比——といふ創作月評中に『新小説』九月號所載、拙作『新嘉坡の一夜』に對する批評のあるのを見出した。

由來雜誌新聞を精讀しない自分は、雜誌新聞の編輯者の爲めに最も調法な人の一人らしい本間氏の筆に成る文章——評論批評紹介翻譯等——を餘り拜見した事が無く、たまに拜見したのがあつても、全く拜見しなかつたと同じやうに、まるつきり忘れてしまつたのである。何れにしても同氏が現文壇の批評家として名のある人である事と、且つ非道い誤譯をする人だといふ以外には殆んど何も知る處が無かつた。

非道い誤譯者だといふ事は、翻譯物の嫌ひな自分の發見ではなく、友達の一人に物好きがあつて、誤譯指摘の興味に没頭してゐて、本間氏の翻譯は頗る蕪雜拙劣である上に間違ひだらけだといふ事を、御叮嚀にも原書と對照して、いやとい

ふ程並べ立ててきかされた事があるのである。その時自分は、どうせ外國語を日本語に譯すのだから、ちつとは間違ひもあるだらうと、自分だつて翻譯をすれば間違ひだらけに違ひないと思ふ心持から、本間氏に同情したが、同時に、そんな不自由な語學の力で翻譯なんかしなければいいのにと考へたのは事實である。

扱て『時事新報』に出てゐる本間氏の批評は前々から續いてゐるもので、その日は第六回目であつた。第一回から讀んでゐない自分には「技巧派と無技巧派の對比」といふ標題の意味がよく解らなかつたが、恐らくは此批評の序論として新秋文壇なるものに於て、多少なりとも努力した作家を分つて、技巧派と無技巧派の二派とし、之を今日の文壇の二潮流と見て批評してゐるのであらうと思ふ。しかし自分が技巧派なのか無技巧派なのかは、凡そ器用と無器用はあつても無技巧と呼ぶ可き作家の存在を知らない自分には想像がつかなかつた。



本間氏は『新嘉坡の一夜』の梗概を記して「永らく英佛に遊んでゐた男が、日本への歸途、新嘉坡に立ちより色街に痛飲して、滯歐中の女難の追懐に耽るといふ一夜を描いたものである」と云つてゐるが、これを讀んだ自分は餘りの意外に喫驚した。これは頭腦が悪いなと思つた。

頭腦のいい作家、頭腦の悪い作家と云ふのは近頃の文壇の流行語ださうで、頭腦のいい派、頭腦の悪い派と對比すると、それが技巧派無技巧派と同意味なのではないかとも思はれる。頭腦の悪い派に云はせると、頭腦のいい方は兎角靈魂の存在を忘れ勝ていけないのださうである。どんな靈魂を持つてゐるのかしらないが、本間氏は明かに頭腦の悪い派の重鎮なのであらうと、その時の苛々した心持は、人の悪い愚劣、皮肉を弄んだ。

別段勝れていい頭腦の所有者でなくても、誰が讀んでもわかる事だと思ふが、

『新嘉坡の一夜』は滯歐中の女難の追懐に耽る事を主として描いた作品では無い。その形式から見れば、新嘉坡の一夜そのものを描いた作品である。詳しく言へば上月と呼ぶ旅客が其地の娼家で、想ひも掛けない女と、想ひも掛けない一夜を過した事を描き、主人公上月が、時につけ折にふれて、彼が荷へる運命の怖ろしさを次第に思ひ知つてゆく事を暗に示してゐる作品である。滯歐中の追懐は、彼の心に潜んで、その一生を暗くする女難の怖れを説明し、主人公をして單に紀行文の筆者、又は寫生的に描いた文章の主要人物よりも一歩進んだものとして浮ばせ度い爲めの背景なのである。

但し作者は近頃の文壇の流行に背馳して誇大な發想や、活動寫眞的小細工にみちた脚色を厭ふ傾向から、無理にも主觀的に説明的に流れるのを避け、強ひて平調な、殆んど紀行文に近い形式を擇んだ。その爲めには「第一毒茶を勧めたと



いふのは眞實だらうか嘘だらうか」と上月は疑つたが、結局わからなかつたままにして、作者は此の一大事にさへ説明を加へずに稿を終つた。それを知つてゐるのは女一人で、上月の心には、それが眞實か嘘かを思ひ迷ふ暗い疑念さへ残ればいいのだと思つたのである。お芝居になり度くない爲めの用意に他ならない。若しも此の平調を心掛けた結果の作品が、單に平調である丈で、暗示に富んでゐないと云つて責めるのならば、作者は此點に於て我が力及ばすと自分自身嘆いて居るのであるから、謹んで評者の眼識の高いのに服したであらう。不幸にして本間氏は作品の骨子をさへ正しくは捉へてくれなかつた。しかも自分では満足した態度で洒々として批評の筆を進めてゐる。

本間氏は、支那苦力を見て「人類に對する親しい感情を起させるやうな人間には見えない」と感じたのをつかまへて「此作者は恐らく美醜の感覺の強い人であ

らう。しかしそれは決して常識の範圍を出でない。此作者には大部分、外形が美醜判断の標準となつてゐる。作者の西洋崇拜もそこから來る。作者の貴族趣味もそこから來てゐる」と斷じ、更に進んで、西洋崇拜貴族趣味もいけれど、それは「その人の熱度乃至信念を裏づけたものでなければならぬ」といつて、最後に「此の作者のやうに美醜判断の標準を、對象の「外形」に置いてなされたものである時、私はそれらを排斥する。さういふ外形的美醜判断を捨てて今少し事象の内部に透入することが必要ではないか。今少し「人類に對する親しい感情」を胸に抱いて一切の事象に對することが必要ではないか。私はこのことについて特にこの作者の反省を望む」と結んだ。

自分は批評の怖ろしさ、批評家といふものの怖ろしさを痛感した。若しも自分が「新嘉坡の一夜」の作者でなく、且つその作品を読んだ事が無くて、此の批評



を見たらば、恐らく自分は本間氏のもつともらしい書振りから判断して、その批評の正確さを疑はなかつたであらう。偽物を憎む自分の性質は、かかる際どうしても本間氏に對して好感を持つ事が出来なかつた。

自分は明かに『美醜の感覺』の鋭い人間に違ひ無い。且つ健全な二個の目を所有してゐる限り、その鋭い感覺は目に觸れる對象の外形の美醜を強く感じる事は當然である。『新嘉坡の一夜』の主人公上月は、長い間の航海に、青空と青海に圍まれて塵埃を浴びず、帆網に鳴る潮風と船側を打つ波の音を職く丈で、濁つた雑音には遠ざかつてゐた。親しい交りを續けて來た同船の客に置いて行かれて、孤獨の哀感に惱んでゐる時に、先づ耳を襲ふわめき聲、石炭の山の崩れる音に平靜を奪はれ、先づ目に觸れるむさくるしい苦力の群を見て、直ちに苛立たしい心から、それを厭惡する念の起るのは當然である。若しその苦力の悲惨なる存在の原

因を考へなければならぬといふならば、作者は評者の『感覺の鈍さ』を輕蔑するより外に爲方が無い。『新嘉坡の一夜』は、社會問題を取扱つた論文では無い。『新嘉坡の一夜』は支那苦力の存在を問題として論じる傾向小説でもない。若し強ひて近時流行の人道がる傾向におもねつて、長々と苦力の状態を嘆き悲むならば、それこそ『藝術的色調』の稀薄なものになるであらう。何れにしても本間氏の如く自分自身の感覺を通して感じる事の無いらしい人、自分自身の頭腦で考へる事の無いらしい人、換言すれば、無闇に他人の書いた本と、その時々々の雑誌新聞がつくる流行を頼りにして生きてゐる傾向の人が考へてゐるやうに、生きた人間は單純なものではない。自然主義の流行する時は、人間を獸扱ひにしなくては淺薄だと考へ、人道主義の力説される時は、一切のものに對して無責任無反省に目をつぶつて愛を感じなければならぬのだと、坐右の銘にして忘れない種類



の人間程馬鹿々々しいものはない。或作品に「人類に對する親しい感情」が滲み出して居るかどうかといふ事は、その作品の中に憎悪怨恨の言葉のありなしに關係はしないのである。生きた此の世の中では、相手の横面を張飛す事さへ「人類に對する親しい感情」を伴つて起る事もある。愛だ愛だと下宿の二階で叫んでゐるのは、それは單に根底の無い覺悟に過ぎない。自分の平調枯淡な作品の場合に引合ひに出しては相濟まない氣がするけれど、日本ではお手輕な愛のかたまりのやうに誤解されてしまつた大トルストイの作品中に、いかに憎悪の念の熾烈に現れてゐるかは頭腦の悪い派にはわからないのであらうか。

評者は又作者を目して「西洋崇拜であり、貴族趣味」だと呼んでゐるが、「新嘉坡の一夜」の何處から推斷して作者を西洋崇拜の貴族趣味だといふのであるか。自分は殘念ながら今日の日本人が歌米人に勝つてゐるものと自惚れて安んじては

ゐられないが、さりとて外の今日の日本人、殊に文壇の人々に比べては、あまりに西洋崇拜の度の低過る一人だとさへ考へてゐる。自分などから見ると、本間氏その他同傾向の人々、もつと明晰に云へばチャアナリズム信奉者程盲目的の西洋崇拜者は無いやうに思はれる。取捨撰擇も無く西洋人の所説を紹介し、西洋人の作品を誤譯する事など、自分などには、思ひも及ばない事である。新嘉坡の町を歩いてゐる上月が、汚ない町を過ぎた後で、大きな旅館の前に立つて、憧憬の念を抱きながら西洋を想ふのは、別れて來た土地に對する愛着から自然と起る感情以外の何ものでもない。さういふあたりまへの温情さへ感じ得ない程の木像的思索家に「人類に對する親しい感情が」ほんとに起るとは想像されない。彼等は先づ西洋の本を捨てて——彼等自身の言葉を借りていへば——街に出づる必要がある。今日の文明の形成者として、東洋人よりも西洋人の方が偉かつた事は疑ひが無



い。しかしそれは單に『外形の美醜の判断』がもたらした結果では無い。その文明を生み出した彼等を尊敬するのである。甚だ面白くない例だが、之を文壇に見ても、本間氏の如き見當違ひの批評家さへ、大きな顔をしてゐられる我文壇の貧弱さは、いかに最負目に見ても崇拜の對象にはなり兼ねるのである。

貴族趣味についても自分は『新嘉坡の一夜』の何處から推断された非難なのか飲み込めない。あの作品の何處に貴族趣味が説いてあるか。しかし若し貴族趣味といふものが、平俗凡庸卑劣淺薄を憎み、よりよき人の世を憧憬する事を指すのならば、自分は確かに貴族趣味だ。『人類に對する親しい感情』を多分に持ち、且人類の醜惡なる事實の力強さに壓迫を感じて惱む自分は、どうかしてよりよき人の世の出現を希望すると同時に、醜惡なる人間の影を潜める事を熱望してゐる。小説の月評にさへ、流行の民衆がる機會を捉へんとする人間の心の『内部に透入

して』、自分はその醜惡を憎むので、その人間の面つきのまづい爲めに嫌惡するのではない。

自分の貴族趣味は、頭腦の悪い人間よりもより多く無反省な人間を憎み、良心を所有しない人間を唾棄する。換言すれば、わけもわからない癖にわかつた顔をし、もつともらしい風をして出たらめを云ふ人間を嫌ふのである。さういふ人間の集團が存在する限り、人類の幸福は阻まれるからである。

自分は長火鉢の側に不自由な身體を横にしたまま、珍しく眞面目に腹が立つて、暫時の間、喧嘩をしたい心持に苦しんだが、頭の上の柱に掛かつてゐる時計が三時をうつたので驚いて起きかへつた。さうして冷くなつた茶を飲んだ時は、自分の弱點だと平生から思ふのだが、又しても、憤慨したつて自分なんか、力では多數者にはかなはないといふ若隱居根性が起きて來て、苦い笑が浮んで來た。



冷静になつた自分は續いて本間氏の芥川龍之介比の小説『奉教人の死』に對する批評を讀んだ。さうしてあの小説を「此作は作者が長崎耶蘇會出版の『れげんだ・おれあ』と題する書の中の傳説に文飾を施したものに過ぎないと云つてゐるのによつても解る通り、全體としてやはり在來の童話の味はひである、傳説の味はひである」と云ひ『童話以上、傳説以上——作者独自の解釋なり、創意なりを加へたものを求めたい』とあるのを見ると氣の毒になつて「人類に對する憐愍」をさへ本間氏に對して感じたのである。

自分は芥川氏の作品を餘り好まないが、しかしそのづばぬけた「技倆」の牙えには敬服してゐる。「奉教人の死」も亦勝れたる作品であると思つた。けれどもあの作品には、本間氏がいふやうな童話の味はひなどは皆無である。傳説の味はひさへ稀薄である。多分にある味はひは、傳説らしい材料を、近代的小説の伶俐な

企畫に活かさうとする工風と、更にその工風をいかにして覆ひかくさんとしたかを示す、智的惡戯の興味である。其處が自分の芥川氏に對する不滿の點で、殊に『奉教人の死』第二節「予が所藏に關する、長崎耶蘇會出版の一書、題して『れげんだ・おれあ』といふ』以下の、此の物語の典據調などは最も悪いいたづらだと思ふ。「れげんだ・おれあ」といふ本の名はあるのかもしれないが、『奉教人の死』は少なくとも芥川氏の創作であらう。若し萬一創作でなかつたにしても、『作者独自の解釋と創意』はありあまる程あるのであつて、それに對して、作者の解釋と創意を求め批評家の存在する事は、やがて才人芥川氏のいたづらつ子らしい傾向を、いやが上にも助長するものに外ならない。芥川氏の惡戯の興味のため本間氏の如き批評家の存在は祝すべきであるが、同時に芥川氏の如き「技倆」の作家の爲めに、そんな惡戯の満足を喜ばせて置くのは面白くない。



自分は二人とも見た事は無いのだけれど、芥川氏の人の悪い微笑を浮べた顔と、本間氏の真面目がつてゐる顔を想ひ浮べて吹出し度くなつた。

「どうも失禮致しました。」

と襖をあけて主婦が出て来たので、自分は何氣ない顔をして新聞をたたんだ。  
「随分御退屈でしたせう。」

「いいえ、新聞を拜見してゐました。」

「さうさう、主人がさう云つてましたよ、今朝の新聞に貴方のお書きになつたものの批評が出て居ますつてね。」

「エエ、今それを讀んでゐたんです。」

「いかがです、評判はいいんですか。」

「イエエ、不相變叱られてゐるんです。」

「なんですか主人は自分の事かなんぞのやうにぶんぶん云つてましたよ。こんな批評を書いても原稿料が取れるんだから文學者は樂だねなんて。」

「だつて私の小説にさへ原稿料を拂ふんですもの。」

自分は主婦の氣持のいい顔付と、齒切のいい言葉を聞いて、軽い氣分になつて笑つた。

「どうも難有うございました。時間ですから芝居の方に行きませう。」

「面白いんですかしら。評判はいいやうですね。」

「評判で新聞のでせう、あてになるもんですか。」

自分は今の本間氏の批評から人を信用しない心持になつてゐたので、憎まれ口をさきながら立上つた。



歌舞伎座に行くと、兄や嫂はもう來てゐて、自分が患部を氣にして妙な格好で横坐りに坐ると、直ぐに幕が開いた。

まるまると肥つた松井須磨子の山姫が金髪をくしけぶりながら、目の前の蜂にいけぞんざいな口をきいて居る。誰だつたか忘れたが、松井須磨子の豊満な肉體の極めて肉感的な事を讚美した文筆の士があつた。たしかに近代的好色男の心をそそる肉體であらう。太い首から、山國産らしい肩の形、つんぐりした胸、豊かにまあるいお尻などは、病的な浮世繪や草艸紙の美人の弱々しさを嫌ふ現代の油繪畫家も喜ぶ姿態かもしれない。不幸にしてその姫が山姫ラウテンデラインといふよりも場末の酒場舞踏場に出る踊子か、日本でいへば酌婦のやうに思はれたので

ある。困つた事には足に坐り癖がついてゐて、うす衣ばかりの曲線の際立つ姿で腰かけてゐると、自然と内輪に曲つてゐて怖ろしく醜くかつた。しかも山姫の無邪氣さを見せる爲めか、子供のやうにばたつかせる足の位置が、揃へて前に投げ出せばいゝのに、兩方に開いてゐるので、愈々酌婦のいた淫猥な格好になつた。自分は新しい戯曲の爲めに冷汗を覺えてゐると、

「これは非道い。」

と兄は低い聲でつぶやいた。教養のある紳士が、何かの機會で、婦人の見るべからざる姿態を見せられた時につぶやくやうな、困つて赤面したやうな兄の様子を見て、自分は腋の下の汗を拭いた。

口のきき方も山姫の無邪氣さには遠く、蓮葉娘が甘やかしほうだいの母親の前でだだをこねてゐるやうであつた。



やがて歌をうたつた。小學校の生徒が「螢の光、窓の雪」と歌ふやうに、極めて單純にうたつた。

やがて踊つた。忘年會でかつばれを踊る會社員よりも危ない足どりだつた。自分は兄と顔を見合せて苦笑した。

言ふ勿れ、又しても外形の美醜によつて判断するものと。自分が此の時の不愉快は、屢々泰西の戯曲を演じる松井須磨子は、何故にもつと歐米人の姿態——身ぶり、手ぶり足ぶりを研究しないか、カチユウシヤの歌をうたひ、さすらひの歌をうたひ、更に山姫の歌をうたふ松井須磨子は、何故にはんたうに聲の出るやうに正式の聲樂の練習をつまないのか。何故に西洋舞踏の初歩位はもう少し正確に學ばないのか。餘りに無反省なその心事を不愉快に思つたのである。

人々は山姫のくるくる廻りながら踊るのを見て、その足のぶざまに太いのを指

さして笑つたが、その足のぶざまに太いのは評せるけれども、その踊りの餘り極端なる拙劣さは許されない。少なくとも足の形をよくする事は不可能に近いが、舞踏は勉強次第で或點迄の進歩は期し得るのである。

森の精ワルドシユラアトの無邪氣らしくいい氣なのは左程でもなかつたが、池の精ニツケルマンのお神樂の素盞鳴尊のやうな風をして、その癖妙に村の色男らしい塗りつぶした顔で、ものを言はない時でも年中變てこに口を開いてゐる氣取つた、いゝ氣持さうなのは、見るに堪へなかつた。

鑄師ハインリツヒは新派の色男のせりふ廻して悲劇がり、牧師、教師、散髪屋は曾我のやの身ぶりでふざけた。

その「外形」の醜さは明白であるが、此の人々に「沈鐘」が了解されてゐるとは、如何に新劇最負の自分にも思ひも及ばない事であつた。あらゆる點に於て不



勉強である。無責任無反省で、且つ自慢さうに演じてゐるのが氣に喰はなかつた。  
 『自由劇場』の役者達は、雑誌新聞に衆をたのんで筆陣を張る頭腦の悪い派に云はせると、『藝術座』などの役者達に比べて本來理解力の少ないものと看做され勝であつたが、頭腦のいい悪いといふ事は學校に通つた年限の長い短いで決まるわけではない。小學校もろくに出ないやうな『自由劇場』の役者は遙に勝れたる理解力を示した。加之あの役者達は、手馴れない泰西の戯曲を演じる事に對して異常な覺悟を持つてゐた。少なくともその戯曲を尊敬し、且つ忠實に演じようとする努力から固くなり過ぎた程敬虔であつた。

一頃『有樂座』でやつてゐた『土曜劇場』の下手な連中さへ、自分には『藝術座』よりも立派なものだつたやうに考へられる。額に汗を流し流し、聲をふりしぼつてゐた彼の一派は、屢々面白いものを見せてくれた。要之それは『外形』の

美醜によつてわかつべき優劣ではなくて、精神的の美醜によつて定まる優劣である。無責任にいい氣な役者は、眞摯な役者にはかなはないのだ。  
 自分は役者達の態度に不満を感じると同時に、その指導者に對しても不満だつた。

自分は松井須磨子を所謂新しい女優の中では、他の者に比べて段違ひにうまいと思つてゐて、指導さへよかつたら、もつといひ芝居をして見せてくれる人だと信じて居る。けれども須磨子の柄から云つても、藝風から云つても、決して『沈鐘』を演すべきではなく、もつと寫實的な戯曲に向く人であると斷言してもいい。何故わざわざ柄に無い『沈鐘』を選で、『藝術座の女皇』に演じさせようとしたのか。或人々は島村抱月氏が妻子を捨てて須磨子とくつついた事實から『沈鐘』を選んだのだと噂するが、そんな評判は信じたく無い。恐らくは『藝術座』の連中



の向不見の結果なのであらう。

けれども開場以來一週間に近いその日さへ、入りは八分迄あつた。「自由劇場」も「土曜劇場」も、その他の劇團の多くも息をひそめてしまつたのに、兎にも角にも「藝術座」は、ひとり帝都の大劇場で客を呼んでゐるのは、原因が無くてはならない。

自分などが餘りに無責任、無教練なうたひぶりに冷汗を覚えてゐる隣の棧敷では、新橋邊の生意氣さうな若い藝者を引連れてゐる成金らしい五十男が、

「須磨子の聲はええなあ。」

と感に堪へてゐるのだから、或は正直に感服して見てゐる多數があるのかもしい。れないけれど、それよりもその人々を感服させる何か特別の原因があるに違ひない。

「よくこんな芝居でも見に来る人があるね、河合のためかしら。」

兄はいぶかしさうに場内を見廻したが、自分は答へる事が出来なかつた。

二幕目、三幕目、四幕目、さうして最後の幕が濟んだ時に、自分は此の見てゐても耻しい戯曲の終りを喜ぶ安心と共に「藝術座」の強味を認め得た。それは向不見の強味である。自分が罵倒したくて堪らない無責任そのものの強味である。さうだ。藝術的良心の無い強味だ。無鐵砲の強味だ。

勿論それは眞の強味ではない。しかし少なくとも、ともすれば現在を支配しようとする強味である。藝術的良心の強い者が、ああでも無い、かうでも無いと思ひ悩み、手も足も出なくなり勝な時に、何等顧慮する事なく、馬車馬の勢を以て駈け出すのだ。實に此の無反省の強味は、現代の政治にも、事業界にも、文壇にも、歴々として現れてゐる。怖ろしいと思つた時、自分は本間久雄氏の存在を想



ひ起した。

「いかがでございます、只今のは。」

お茶を持って来た出方は、愛想のいい顔をつき出してきいた。

「あんまり感心しなかつたよ。」

「なんですか手前どもには、からつきしわからねえんですが、兎に角歌舞伎座の

ものぢやございませんや。」

と一人で眉をあげて罵倒したが、

「まづ山の手のものでございませうなあ。」

と云ひ得て嬉しいと云つた顔付で立ち去つた。

自分はふだんならば、こんな月並な江戸がりは嫌ひなんだが、その時は味方を

得たやうな氣がして一緒に痛快がつた。それは確かに弱者の聲であらう。吠えら

れて逃げてゆく犬の悲しい叫びであらう。後から群つて追ひ迫る野良犬の一匹々々別々ならば怖ろしくもないのだが、密集してゐる力の塊にはなみなみのものではかなはない。素早く横町に姿をかくす育のいい犬の聲にちがひない。さうだ。文壇も劇壇も、たとへ根底の無い勢力ではあらうけれど、ほしいままに跋扈してゐるのは向不見の強味を持つ徒輩である。一人々々数へると、田圃の稲子に過ぎないけれど、密集して来る時の力は怖ろしい。しかし自分は吠えながら逃げる大を學ぶのはよさう。噛み殺される迄闘つてみよう。構ふもんか、こつちも少しは向不見でやつつけろ、と思つた時、自分は既に大なる群集の前に石つぶてを浴びてゐる心持がして額に血の上るのを感じた。(大正七年九月廿四日)



先生の忠告



或日曜の朝の事であつた。寢坊をした床の中でぼんやりして、起きようか寝て  
のようか迷ひながら、枕頭の火鉢の上の鐵瓶の口から、さかんに立昇る湯氣を見  
てゐるところに、こまつちやくれの下宿の小婢が、來客のある事を告げに來た。  
その取次いだ名前が昔の學校友達のそれと同一だつたので、自分は一緒に惡戯つ  
子だつた中學時代の友達の、今川燒のやうにまあるく平べつたくて、しかもぶよ  
ぶよしてゐた顔中を想ひ出しながら、狼狽して飛起きて洗面場に馳けて行つた。  
身じまひをして、玄關に出て見ると、其處にはまだ十八九の見馴れない少年が  
一人ゐるばかりだつた。側に立つてゐる小婢に、  
『お客は。』



と訊くと、

『そのお方です。』

と指差した。

『先生ですか。』

少年は意外だったといふ表情を包まずに、此方を見上げてから帽を取つて頭をさげた。

『お上んなさい。』

先生と呼びかけられた自分を、げんさうに見守つてゐる小婢の目を避けるやうに、心中少し狼狽しながら、さつさと先に立つて自分の室に少年を導いた。先生と呼ばれた丈で、何の爲めに此の少年が自分を訪問したか、彼が如何なる種類の人間であるかが直感された。自分は寧ろ不機嫌で、相手の態度を見守つた。

少年は一見不良少年らしい沈着さで、初対面の年長者の前で、悪びれもせず煙草をふかしたが、紺がすりの着物に紺がすりの羽織で、海老茶の毛糸で編んだ羽織の紐が如何にも子供らしかつた。

『私を訊ねて来たのは如何いふ御用です。』

と自分の方から切出した。

『實は朝日新聞の〇〇さんが、先生に紹介してやらうと云うて下さつたので……』

『〇〇さん？』

自分はいくら考へてもそんな人は知らなかつた。

少年の云ふところに據ると、〇〇といふのは大阪朝日新聞の社會部の記者であるが、少年が文學に熱中して、文學談ばかり持ちかけるので、それでは此頃大阪



に来てゐる水上に紹介してやらうと云つて、下宿の所在迄教へて呉れたのださうだ。どうしても自分にはそんな知己は無いので、臍に落ちない話だつたが、例の新聞記者一流の出たらめをやつたんだなと思つて苦笑するより他に爲方が無かつた。

時に甚だしく口の重い事のある自分に對して、訪問者もはかなくしく口をきかず、次第に手持無沙汰らしく見えて來るので、無理に何か話材をこしらへても、相手は兎角簡單な應答をするばかりで、且つ最初は不良少年かと思つた程無遠慮な態度に似ず、返事をする時は羞しさうにさへ見えるのであつた。

彼はその頃甲種商業學校の五年生で、目の前に卒業試験を控へてゐた。

「學校はいやでいやで適はん。」

と駄々子の物言ひをして、文學以外の學課に興味が無く、卒業出來るかどうか

もわからないといふ意味の事を云つた。

父親は死んでしまつたけれど、その父が生前残した事業があつて、母親は學校を卒業すると同時に其處で働かせるつもりである。彼は學校なんか今日からでもやめて、小説の作家になり度いのであつた。

「學校なんぞは役に立ちませんア。」

と少年は少し雄辯になつて、自分の同感を求めた。

聽いてゐるうちに自分の目の前には、その少年の年頃の自分自身の姿が浮んで來た。學課は怠けて運動場を馳廻り、文學書以外には殆んど何も本は讀まず、一ヶ月の缺席數は出席數よりも遙かに多く、落第に落第の續いた時代である。自分には苦も無く目前の少年の心持になり切る事が出來た。けれども自分は夙の昔臆病な大人になつてゐるので、相手の一本調子にうつかり相槌は打てないぞと、腹



の中で、油断のない狡猾な注意を忘れなかつた。

『けれどもね、矢張り學校は續けてやつた方がよござんすよ。』

自分は學校では別段小説家に特に必要な知識を興へては呉れないにしても、學問の根底があると此の世の中を知らずに深味を増すに違ひ無いなど、もつともらしい顔付をして云つた。

少年は『金色夜叉』を幾度も幾度も愛讀した事を話し、『蒲團』に感心した話をし、谷崎潤一郎氏の作品を好む事を話し、曾て友人と小遣を出しあつて雑誌を發行し、創作を發表した事を話した。その癖時々思ひ切つて愚劣な質問をして先生を困らせた。

『一體新聞小説家になる方がいいでせうか。』  
などと眞顔で訊きました。

『それで満足してゐられればね。』

少し中腹で返事をして、彼には通じないところがあつた。

話をしてゐる中に、最初不良少年かと思つた程無遠慮に見えたのも、口のきき方のぞんざいなのも、要するに彼がぼんぼんだからだと解つて来た。女の姉妹はあるが男は一人きりだといふ彼は、父母の懐に甘つたれて育つたに違ひない。さう思つた時、自分は我儘らしい少年の態度を是説した。

元來未見の人に逢ふのを好まない自分は、たまたま知らない人に面會を求められるのを、何よりも迷惑な出來事の一に數へてゐる。

紹介も無しに突然人を訪れるのは新聞記者か雑誌記者に多いが、行儀が悪く、人擦れてゐて、且つ他人の迷惑には頓着しない點に於て、世に所謂文學書生も新聞記者に劣らない物である。